

## 詩歌のジャポニスムの開花

——クーシュューと『N・R・F』誌（一九二〇）「ハイカイ」アンソロジー掲載の経緯

柴田依子

はじめに

一九世紀後半に日本の美術・工芸品が輸出されて、ヨーロッパにジャポニスムの流行をもたらし、特に浮世絵はフランスの印象派の画家たちに深い影響を与えた。日本詩歌の移入は絵画より少し遅れて、一九世紀末に、和歌がヨーロッパ語にまず翻訳された。俳句（俳諧）は二〇世紀に入る前後に、イギリス、ドイツ、フランスに、ウイリアム・アストン、バジル・ホール・チェンバレン、カール・フロレンツ、クロード・ロウジェーヌ・メートル、ポール・ルイ・クーシュュー、ミッシェル・ルヴォンなどによって紹介され始めた。その一人であるクーシュュー (Paul-Louis Couchoud, 1879-1959) 哲学者、精神科医（図1）は、フランスに、俳句を、翻訳と創作の領域から初めて本格的に紹介し、著書『アジアの賢人と詩人』(Sages

et Poètes d'Asie, 1916)<sup>(1)</sup> によってフランス本国を初めとしてヨーロッパの芸術家たちに広範な影響を及ぼした。本年二〇〇四年は、彼が青年期に「世界周遊」の給費生として来日（一九〇三—〇四）し、俳句をフランスへ移入してから一〇〇年を迎える<sup>(2)</sup>。

フランス帰国後、クーシュューによる俳句の仏訳紹介（論文「ハイカイ」<sup>(3)</sup>）と実践の活動（ハイカイ創作「水の流れのままに」<sup>(4)</sup>）は、論文「ハイカイ」を再録した著書『アジアの賢人と詩人』刊行後、一九二〇年九月、『N・R・F』(La Nouvelle Revue Française「新フランス評論」) 誌八四号の巻頭に「ハイカイ」アンソロジー<sup>(5)</sup>（図2）となって花開いた。ダダの芸術革新運動がパリで推し進められていた時期<sup>(6)</sup>、同誌には詩人や作家、ポール・エリュアール、ジャン・ポーラン、ジュリアン・ヴォカンス、ジャン・リリシャル・ブロックを初めとする一二二人によるハイカイがクーシュューを筆頭に

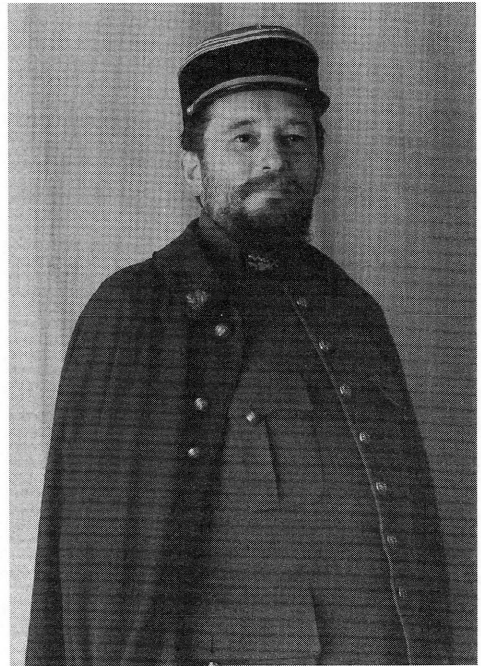


図1 軍医姿のクラーシュー。1919年5月13日撮影、40歳。同日アナトール・フランスとともに写真撮影に赴いている。(アルベール・カモン博物館蔵)

掲載され、フランス・ハイカイが新しい詩のジャンルを開くことを期待する旨のポーランの前書きが置かれている。同誌刊行後、この「ハイカイ」アンソロジーについて、ポーラン宛にルイ・アラゴンは批判的な手紙を書いているが、同誌の刊行された一九二〇年を、フランスの文芸評論家バンジャマン・クレミューは「ハイカイの年」と呼んでいる。この「ハイカイ」掲載が導火線となつて、フランスでは一九二〇年代には、「詩法」(Art poétique)などの優れたハイカイ集や二八三篇に及ぶハイカイ選集などが次々と発表された。また俳句の受容はリルケなどヨーロッパの芸術家たちにも及び、文学の領域を越えて音楽の分野にも波及していった。この「ハイカイ」アンソロジーの一部は、翌年日本にも逆輸入されて第二次『明

星』で紹介された。

この画期的な俳句受容の潮流は、「ジャポニスムの第二の波」とも言われているが、本稿では詩歌のジャポニスムの開花と名付けて、まだ十分に明らかにされていない『N・R・F』誌「ハイカイ」アンソロジー掲載の経緯について、クラーシューの俳句紹介の多面的な活動を軸に、筆者がパリで発掘・収集した資料をたどりながら考察を試みたい。

『N・R・F』誌「ハイカイ」アンソロジーについては、W・L・シュワルツなどによる多くの言及があるが、その成立過程の背景については資料が埋もれていたため不明な部分が多かった。幸い同アンソロジー成立経緯を解明する多くの関係資料(書簡)が最近フランスでベルナル・バイヨの論文に発表され、また、筆者は、クラーシューの未刊書簡(ヴォカンス宛)他も確認することができた。

本稿では、『アジアの賢人と詩人』の刊行から『N・R・F』誌に「ハイカイ」アンソロジーの掲載が実現するまでの過程について、クラーシューやポーランを中心とする一次資料を紹介しながら、明らかにしてゆきたい。

筆者が用いる主な資料は、クラーシューの書簡(ポーラン宛)と未発表書簡(ヴォカンス宛)、及びポーランの未発表を含む書簡(ヴォカンス宛)と論文「日本のハイカイ Les haï-kai japonais」<sup>(註1)</sup>、それに未発表資料として、手書きのエリュアール書簡(ポーラン宛)や



7<sup>e</sup> ANNÉE. N° 84 NOUVELLE SÉRIE 1<sup>er</sup> SEPTEMBRE 1920

# LA NOUVELLE REVUE FRANÇAISE

SOMMAIRE

HAI-KAIS  
PAR  
PAUL-LOUIS COUCHOUD, JULIEN VOCANCE, GEORGES SABIRON,  
PIERRE ALBERT-BIROT, JEAN-RICHARD BLOCH, JEAN BRETON,  
PAUL ELUARD, MAURICE GOBIN, HENRI LEFEBVRE, RENÉ  
MAUBLANC, JEAN PAULHAN, ALBERT PONCIN

LOUIS ARAGON TOUTES CHOSES ÉGALES  
HENRY DE MONTHERLANT D'AILLEURS  
SHAKESPEARE CRITÉRIUM DES NOVICES  
(Traduction d'ANDRÉ GIDE.) AMATEURS  
ANTOINETTE ET CLÉOPATRE (Fin)

RÉFLEXIONS SUR LA LITTÉRATURE PAR ALBERT THIBAUDET  
MÉMOIRES

NOTES PAR ROGER ALLARD, ANDRÉ BRETON, LOUIS  
MARTIN-CHAUFFIER, VALÉRY LARBAUD, HENRI POURRAT,  
HENRY PRUNIÈRES, JACQUES RIVIÈRE, ALBERT THIBAUDET :

LA JEUNESSE DE STENDHAL, PAR PAUL ARBELET. — LA CRISE  
SOCIALE DE 1848, PAR PIERRE QUENTIN-BEAUCHANT. — LES  
BUCOLIQUES ET LA COPA DE VIRGILE, PAR ERNEST RAYNAUD.  
— GASPARD DE LA NUIT. — INTRODUCTION A QUELQUES ŒUVRES,  
PAR PAUL CLAUDEL. — LOU RAMPAU D'ARAM, PAR JOUSÉ D'ARBAUD.  
— LES SEPT CHANSONS A L'OPÉRA. — LETTRES ANGLAISES : LA  
QUESTION DES ANGLICISMES. — M. PIERRE LASSERRE CONTRE  
MARCEL PROUST. — LES REVUES. — MEMENTO

RÉDACTION & ADMINISTRATION  
35 ET 37, RUE MADAME, PARIS-VI<sup>e</sup>. TÉL. : FLEURUS 12-27  
LE NUMÉRO : FRANCE : 3 FR. 50. — ÉTRANGER : 4 FR.

# LA NOUVELLE REVUE FRANÇAISE

REVUE MENSUELLE  
DE LITTÉRATURE ET DE CRITIQUE

DIRECTEUR : JACQUES RIVIÈRE  
SECRÉTAIRE : JEAN PAULHAN

CONDITIONS DE L'ABONNEMENT  
ÉDITION ORDINAIRE  
FRANCE : UN AN : 36 FR. — SIX MOIS : 19 FR.  
ÉTRANGER : UN AN : 42 FR. — SIX MOIS : 22 FR.  
ÉDITION DE LUXE  
UN AN : FRANCE : 75 FR. — ÉTRANGER : 90 FR.

COMPTE CHÈQUES POSTAUX N° 16933

ADRESSER CE QUI CONCERNE LA  
RÉDACTION A M. JACQUES RIVIÈRE  
ADRESSER CE QUI CONCERNE  
L'ADMINISTRATION A L'ADMINISTRATEUR

LE DIRECTEUR REÇOIT LE  
VENDREDI DE 4 H. A 6 H.  
L'ADMINISTRATEUR REÇOIT LE MARDI  
ET LE VENDREDI DE 4 H. A 6 H.

LES DEMANDES DE CHANGEMENT D'ADRESSE DOIVENT ÊTRE  
ACCOMPAGNÉES DE 1 FR. EN TIMBRES-POSTE OU MANDAT

LES OUVRAGES ENVOYÉS POUR COMPTE-RENDU DOIVENT ÊTRE ADRESSÉS  
IMPERSONNELLEMENT A LA REVUE EN DOUBLE EXEMPLAIRE

LES MANUSCRITS NE SONT PAS RETOURNÉS

LES AUTEURS NON AVISÉS DANS LE DÉLAI DE DEUX MOIS DE L'ACCEP-  
TATION DE LEURS OUVRAGES PEUVENT LES PRENDRE AU BUREAU  
DE LA REVUE OÙ ILS RESTENT A LEUR DISPOSITION PENDANT UN AN

COPYRIGHT BY LIBRAIRIE GALLIMARD 1920

図2 1920年9月1日刊の『N・R・F』誌84号の表紙(左)と裏表紙(右)

ヴォカンスの献辞<sup>(2)</sup>(ポーラン宛、ブロックの「カイエ」<sup>(1)</sup>その他で  
ある。参考資料として『N・R・F』誌掲載の「ハイカイ」アン  
ソロジの原文とその全訳を添付する。

一 クーシューの来日と帰国後の俳句紹介活動から著書  
『アジアの賢人と詩人』刊行へ

最初に、著書『アジアの賢人と詩人』刊行以前、クーシューの  
青年期の初来日とフランス帰国後の俳句紹介及び実践活動につい  
て触れておきたい。来日と著書成立の経緯については世界周遊中  
のクーシューの書簡にもとづいてすでに発表した<sup>(2)</sup>のでその一部を  
要約し、俳句紹介の特徴とジャポニスムとの関連について少し補  
足する。

1 「世界周遊」途次の初来日とメートルとの出会い

クーシューは、パリ万国博の翌年、一八七九年(明治12)フラ  
ンスのイゼール県ヴィエンヌエに生まれた。一八九八年(明治  
31)エコール・ノルマル・シュペリウールに入学し、ベルクソンら  
のもとで哲学を修めた。一九〇一年、哲学のアグレジュ取得後、  
ドイツのゲッティンゲン大学の外国人講師として着任。一九〇二  
年、スピノザの歴史研究『ブノワ・ド・スピノザ』(Benoit de

Tôkyô, 23 janvier 1904

Monsieur le Recteur,

Depuis quatre mois et demi que ma dernière lettre vous a été adressée, je suis resté au Japon. C'est un séjour un peu plus long que je ne prévoyais. Comme mon professeur, M. Maître, j'ai été prié, plus que je n'ai eu d'attentes, par l'intérêt et le charme de ce pays. Une circonstance m'a permis d'y prolonger mon séjour, sans augmenter considérablement mes frais: c'est la vie commune que m'a offerte M. Maître. Grâce à son expérience et sous sa direction, j'ai pu pendant

février: Koishikawa, Haramachi, 102,  
Tôkyô, Japon. Je suis devenu comme

図3 東京で書いた世界周遊報告のクローシユ-手書き書簡の一部。1904年1月23日付。(フランス国立史料館蔵)

Spinoza) 刊行後、「世界周遊」パリ大学の給費生に選ばれ(注2参照)、同年九月、世界周遊に向けて船出。出航後七ヶ月間ギリシアなど一〇ヶ国以上の地中海諸国を一周し、今日的な問題に目を向けるだけではなく、「古代」美術に深い関心をいだき、ローマ、ボンペイ、アテネ、カイロなどで美術館を丹念に見学してまわり、また芸術と歴史をめぐる多くの旅をした。さらにアメリカ、カナダを見聞した後、一九〇三年(明治36)九月、二四歳で初めて極東の国、日本に到着した。日本に深く心惹かれ、周遊を続けずに翌一九〇四年五月まで滞在し、俳句を発見する機会を得た。

一〇〇年前、一九〇四年一月にクローシユ-が東京で書いた「世界

周遊」中の「報告書簡」(パリ大学学長宛)が遺されている(図3)。日本語や日本詩歌の予備知識もなかったクローシユ-が俳句に出会う機会を得たのは、寄寓先のクロード・ウジエヌ・メートル(Claude-Eugène Maître 1876-1925 フランス国立極東学院研究員、後同学院院长)を介してのことである(23)。

クローシユ-は、メートルの論文「チェンバレンの『芭蕉と日本の詩的エピグラム』 Bashô and the Japanese poetical Epigram」やチェンバレンのテキストから多くを学んだことを述べているが、クローシユ-の多彩で斬新な俳句紹介には、絵画との関連が際立っており、特にメートルの論文からの影響がうかがえる。

メートルの論文中には日本詩歌における特徴―「ますます簡素な表現形式へと向かう日本詩歌の一貫した傾向」について、日本絵画との関連から分析した見事な考察があるので二ヶ所紹介しよう。

「短歌や俳諧の簡潔さ」La brièveté des tanka et des haikaiは「画(山水画)におけるデッサンの単純化や素描趣味と同じ原因に由来する」(BEFFEO, 1903, p. 729)

「簡潔さは、日本人が芸術に関して抱いた特有の発想によっていわば要請されているのであり、そこから日本人は表現の方法というよりはむしろ暗示の方法を発見したのである」

où (les) Japonais) ont vu moins un moyen d'expression  
qu'un moyen de suggestion (*Ibid.*, p.729)

## 2 フランス帰国後の俳句紹介と実践活動

○ クーシューの俳句紹介 —— 「ハイカイ (日本の詩的エピグラ  
ム)」

フランス帰国の約二年後、一九〇六年に、クーシューの「ハイカ  
イ (日本の詩的エピグラム) LES HAIKAI (Épigrammes poétiques  
du Japon) I-IV」という論文が著名な月刊文芸誌 (*Les Lettres*, 1906,  
No.3, 4-5, 6, 7) に連載された。これは世界周遊中の日本滞在の研修  
成果であり、フランスにおける初めての本格的な俳句の翻訳紹介と  
なった。

この「ハイカイ」の論文には、蕪村を中心とする一五八句を取り  
上げ、その魅力や特質などについて、メートルの論文中にある日本  
詩歌と日本絵画との関連の論考を撰取し、俳句と浮世絵の関連に発  
展させて、以下のように紹介している。

俳句を「日本の芸術の一形式」であるとみなし、その特質として  
「大胆なほどの単純化 simplification audacieuse」 「明確な幾本か  
の描線のうちに動きのある情景の細部や風景の無限のひろがり被封  
じ込めている、日本風の素描 un croquis japonais」を挙げている。  
俳句の歴史について、絵画のそれと対比して、「最盛期は十七、八

世紀頃」であるが、「その発展は絵画における大衆派、つまり浮世  
絵の発展と同時期」であり、ハイカイ (俳諧) という名は、「滑稽  
な」「大衆的な」という意味であるとし、伝統的な「ウタ」と比較  
して、「写実的な絵 la peinture réaliste」つまり「版画や絵手本  
des estampes et des livres dimages」 「禁じられた主題はない  
pas de sujets interdits」など「そこには日本人の生活がそっくり  
そのまま息づいている toute la vie japonaise peut y grouiller」と  
述べている。また、「俳句の黄金時代である十七世紀においては、  
俳人は専ら風景画家、動物画家であったが、十八世紀になって身の  
まわりの風俗描写の部門が盛んになった」とみなしている。「俳人  
たちのなかには農民とか遊女とかを描くことに卓越した専門家が出  
るようになった」こと、「春信や湖龍齋のように、女人ばかり描く  
一派もあった」ことも述べ、「浮世絵と俳句の区別が記憶のなかで  
はっきりわからないほどである」と記して、「鍋さげて淀の小橋を  
雪の人」をはじめとする蕪村の俳句や川柳も仏訳紹介している。

配列構成としては、モチーフ別に三部門 (動植物、風景、小風俗  
画 scènes de genre) が立てられ、最後に、作者別 (主に芭蕉と蕉門、  
そして蕪村まで) を加えている。全句数は、一五八句 (川柳六句含  
む) 中「小風俗画」、人事にあたる句が最も多いことは注目すべき  
ことである。部門別の句数は、動植物 三四句、風景 四九句、小  
風俗画 五九句、作者別 一六句 (注二句を含む) である。作者は、

宗鑑や守武などから、芭蕉や、去来、其角などの蕉門、また鬼貫、そして千代女、さらに蕪村、一茶までのほぼ四〇人に及んでいる。

そのうち蕪村句は三分の一以上(六三句)を占めているが、二句を除いてクーシューが初めて翻訳したものである。クーシューは蕪村の俳句に関して、「絵画的 pittoresque」、「題材の「多様性」、そして「人間性」などを挙げて非常に高い評価を与えている。<sup>(27)</sup>

クーシューは、チェンバレンが俳句を「日本の抒情的エピソード」となづけていること、その特質を「簡潔さと暗示力」であると定義していることも紹介している。クーシュー自身は、俳句を「一瞬の驚き un bref étonnement」と定義し、芭蕉(「草臥て宿かる比や藤の花」)や蕪村(「かりそめに早百合生けたり谷の坊」)その他の句を挙げて、「ここに「俳諧芸術 (l'art du haikai)」のすべてがある」こと、「それは私たちの感覚に与えられるつかの間の衝撃 C'est une secousse brève donnée à nos sens」<sup>(28)</sup>であると述べている。

さらに日本の俳人たちについて、「ハイジンは指し示すだけでよいのだ Il (haïjin) lui suffit de désigner」と記し、また「ハイジンは美を求める巡礼者であった les haïjin étaient en pèlerinage esthétique」とし、「彼らは北斎の画『東海道』あるいは『富嶽百景』から私たち(西洋人)が思い描く古き日本をめぐる旅のなかで、ありとあらゆる驚嘆やありとあらゆる冒険を経験していた。 Ils connaissaient tous les émerveillement et toutes les aventures de ces

voyages à travers l'ancien Japon que nous imaginons d'après les albums de Hokusai — le *Tokaido* ou les *Cent vues de Hokusai*」<sup>(29)</sup>とし、「日本の小径をさすらいながら、現実そのままを小片の詩 (miettes de poésie) に変えてしまおうとする、すこぶる芸術的な放浪者」であるとも記している。<sup>(30)</sup>

○ 俳句紹介の実践活動 —— 「ハイジンの最初のグループ」とハイクイ集『水の流れのままに』

この仏訳紹介論文発表の前年、クーシューは一九〇五年七月、初めてのフランス語のハイクイ集『水の流れのままに』(注3参照)(図4)を友人(「ハイジン」仲間)とともにすでに自費出版していた一五頁からなるこの小冊子には七二篇のフランス・ハイクイが収録されている。

帰国してから俳句紹介の実践活動を始めていたのである。友人仲間を自分の部屋に招いて、日本から持ち帰った「カケモノ」をひろげながら芭蕉や蕪村の俳句の魅力を説いていたことや、周囲に数人の「ハイジンの最初のグループ」が生まれていたこと、その仲間にはアルベール・ボンサンやアンドレ・フォールなどがいたことを、仲間の一人であったヴォカンスが回想し、報告している。<sup>(31)</sup>

クーシューは、「ハイジン」仲間の、彫刻家ボンサンと画家フォールを道連れとして、「日本のハイジンの魂」を実践する放浪の舟

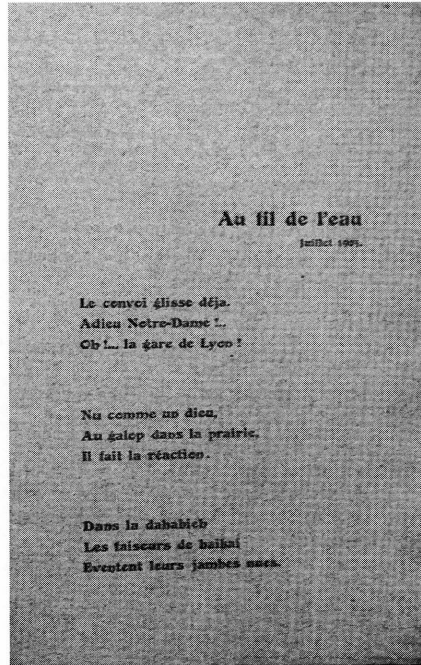
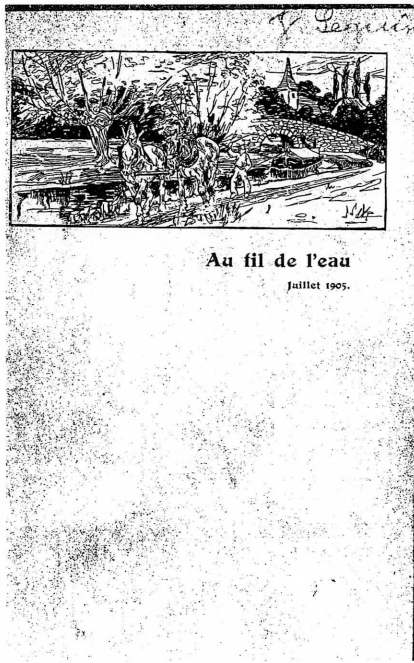


図4 『水の流れのままに』 *Au fil de l'eau*の表紙(左)と最初の頁(右)。ジュリアン・ヴォカンスの旧所蔵本、上部に彼の実名(J.Seguin)のサインが遺されている。(P.ブランシュ所蔵)

旅に出かけ、その印象を三行のハイカイ形式で創作している。『水の流れのままに』のハイカイ作品には、夏の一ヶ月間の旅における冒険と田舎の風物や人事に触れた「一瞬の驚き」が、即興的に、簡

潔に、そして絵画的に、またときには滑稽に描写されている。人事をモチーフとしたハイカイが最も多い。

三番目のハイカイ(図4右側参照)では船中の仲間たちの様子が描写されている。自分たちを「ハイカイ作者たち」に見立てている。

Dans la dahabieh 屋形船で

Les faiseurs de haïkai ハイカイ作者たち

Eventent leurs jambes nues. 裸の脚扇ぐ。

『N・R・F』誌の「ハイカイ」アンソロジーに、クーシュー作として『水の流れのままに』から初めて採録されたハイカイが一篇あるが、動植物や風景をモチーフとしたハイカイが多く採られている。そのなかの三篇を紹介しよう。

ロバをモチーフとした一篇

Sur le chemin de halage 曳船道に

En bonnets de fous 道化帽子かぶった

Deux bourricots. ロバ二頭。

現在ではもう見かけることのない、船を曳くロバの姿の光景が前置詞と名詞のみの三つの小句からなる省略された構文からの確に描

写されている。これはこのハイカイ集の表紙の挿絵となっており、その下に書名“*Au fil de l'eau*”と年月“1905 juillet”が記されている(図4参照)。

フランスで夏の花としてポピュラーな、朱や黄色の金蓮花をモチーフとした一篇

Dans le soir brulant

燃ゆる夕暮れ

Nous cherchons une auberge.

私たちは宿を探す。

O ces capucines!

ああ この金蓮花!

猛暑の夕暮れ、探しあぐねてやっと辿り着いた宿の庭に、金蓮花の花々が落日に映えていた。思いがけない金蓮花の花々の出現の瞬間の感動が三行目に感嘆符と名詞のみの構文で描写されている。

このハイカイには、芭蕉の句(草臥て宿かる比や藤の花)の模倣がうかがえることが指摘されている。

紙の花をモチーフとした一篇

Une simple fleur de papier

一輪の簡素な紙の花

Dans un vase.

花瓶に。

Eglise rustique.

田舎の教会。

これは彼自身の訳した蕪村の俳句(かりそめに早百合生けたり谷の坊)を撰取している。この俳句中の「早百合」を、フランスの野に咲く春の花「アネモネ」に置き換えて訳し、「質素なアネモネの花は、質素な田舎の寺を想起せしめる」とクーシューは解説している。この説明から一輪の紙の花は田舎の教会の簡素さを暗示しようとしたことがうかがえる。花瓶にたった一輪の花、そこにクーシューは日本の住みなし方を見出しているように思われる。

この二篇は、先述した、クーシューが「俳諧芸術」としてあげていた俳句の仏訳の模倣である。

このハイカイ集は、無記名の三〇部の自費出版にすぎなかったが、俳人仲間のヴォカンスも述べているように、フランス・ハイカイのルーツとなった本であった。

一〇年後、一九一六年、第一次大戦中に、ヴォカンスは、同ハイカイ集などに触発されて、戦場の光景を、ハイカイによって表現する着想を与えられたのである(後述)。そのハイカイ作品集「戦争百姿」(Cent visions de guerre)が初めて公に「グランド・ルヴェ」(Grande Revue)誌に発表された。同ハイカイ集の名(二〇二篇)は北斎の『富嶽百景』にちなんでいることが記されている<sup>(2)</sup>。

二 『アジアの賢人と詩人』のフランスにおける影響

——ポーラン、エリュアール、ブロック

大戦中の一九一六年一〇月、クーシェーの著書『アジアの賢人と詩人』が刊行された。先述の論文「ハイカイ」は、「フランスの俳人たち」を増補して「日本の抒情的エピグラム Les épigrammes [yriques du Japon]と改題して、同書に収録されている。同書中に、ヴォカンスのハイカイ作品「戦争百姿」一八篇を引用し、「俳句がどんなに新しい素材だろうと添ってきたように、この抒情的エピグラムはあの恐ろしい素材にも従った」「ヴォカンスのこうしたハイカイは日本の俳句集に添えて紹介する価値があると思う。ちょうどわれわれフランスの版画が、ときに日本の浮世絵と対をなすと考えられるのと同じように」と紹介している<sup>(33)</sup>。

また同書には、刊行に際して一九一六年にまとめられた自著の「序章」がある。この序章は重要であることを、W・L・シュワルツが著書で指摘しているように、そこには、日本詩歌（俳句や和歌）のことを、普遍的な詩の本質（「オルフィスム」）に触れるものとして、マラルメの詩学に引き入れて紹介している箇所があるので引用しよう。

「日本の抒情的エピグラムの興味深い点は、不連続の詩（*la poésie discontinue*）の完璧な模範を示していることである。この不連続の

詩こそ、日本の全ての詩人、ことによるとアジアの全ての詩人が目指しているものなのだ。ステファヌ・マラルメはフランスの抒情詩に侵入した雄弁を告発した。彼は散文ではどうしても語りえないことだけを詩で表現したいと思ったのだ（Il aurait voulu que fussent mises en poésie seules les choses qui d'aucune façon ne peuvent être expliquées en prose）。詩が道を踏み外したのは、「ホメロスの大なる逸脱からのことだ」とマラルメは微笑みながら語った。それはホメロス以前に何があったのかと問われると、マラルメは答えて言った、「オルフィスム」と。インドのヴェーダー賛歌、中国の短詩、日本の「ウタ」や「ハイカイ」は、マラルメのいうオルフィスムに近いものである（*Les uita et les haikai japonais touchent à l'orphisme mallarméen*）。それに比べると、西洋のすべてのジャンルの詩は雄弁である。「詩は純粹な感覚のなかに飲み込まれる。詩はこの純粹な感覚に何らかの続きを与えることを手びかえる」（*la poésie sengloutit dans la sensation pure. Elle se défend de lui donner une suite*）<sup>(34)</sup>。

この箇所に関しては、ポーランが関連紹介（後述）し、同一箇所を全文をルネ・モーブラン（*Le Pamphre, 1923*）やW・L・シュワルツ（邦訳『近代フランス文学にあらわれた日本と中国』（原文、一九二七）が引用紹介している。また作家ブロックもその全文を「カイエ」に書写しており、詩人リルケの所蔵本にもマラルメの詩の定義づけの



箇所「いかなる手段においても散文において表現されえない事物のみ詩の中で表現されるべきである」にアンダーラインが遺されている。

このように俳句を、ジャポニスムの底流のなかで、しかも普遍的なポエムの視座に引き入れて、みずみずしい感性で紹介したクーシューの書は、フランスを初めとして西洋の芸術家たちを魅了し、創作活動を触発した。リルケについてはすでに知られていたが（注10参照）、フランスにおける詩人や作家、作曲家、知識人などに対する同書の影響にはめざましいものがある。『N・R・F』誌の「ハイカイ」アンソロジーに掲載されている詩人や作家、ポーランを初めとして、エリュアール、ブロックについて紹介しよう。

### 1 ジャン・ポーラン (Jean Paulhan 1884-1968) における受容と論文「日本のハイカイ」

ポーランは、『N・R・F』誌編集長（一九二五—四〇）としても活躍し、二〇世紀フランス文学を支えた作家の一人であるが、「ハイカイ」アンソロジーには彼の前書きがあり、ハイカイ六篇も掲載されている。一篇を掲げる。

Qui te parle en souriant ? 誰が微笑みながらお前に話かけ

ているの？

Non, c'est le ruisseau qui roule いいえ、それは小川が揺すっているの  
Quelques fleurs 何輪かの花々を

この一篇には、早瀬を流れゆく花を目にした「短い驚き」が、単純化された三句に言語化されている。

ポーランは、一九一七年二月、論文「日本のハイカイ」を『ラ・ヴィ』（注18参照）に発表し、クーシューの書を「バランスがとれた、すばらしい著書」と評し、俳句に関する章について紹介している。この書の初版刊行は一九一六年一月であり、彼の論文の掲載は翌年二月であることから、ポーランは初版を読んだことがうかがえる。ポーランのもとにはクーシューからの書簡が遺されており（注16参照）、書簡交流の時期は、論文の掲載の年から始まっている。その紹介に先立ち、その掲載の前後に書かれたクーシューからポーラン宛の二通を提示しよう（本稿の主題に関連する部分を選び、邦訳で紹介する）。

○（病院通り一〇六番地 エペルネー、一九一七年二月一六日）

いただきました魅力的なお手紙に対して、もっと早くお礼を申しあげべきでしたが、休暇や出張、所用が重なり遅れてしまいました。私のことをたいへんよくご存じでいられますことにうれしい驚きを感じております。あなたが『ラ・ヴィ』誌上

に頁を割いてくださるとの論文を、このうえない共感とこのうえない熱い感謝をこめて読ませていただきます。(略)私への高い評価をあなたからいただけますことを大変光栄に存じます。日本のエビグラムとマダガスカルのを比較することはたいへん興味深いことでしょう。(中略)

いつかお目にかかる機会に恵まれます時には、恵み深い神々に感謝いたします。その折りを待ちつつ、感謝と共感の念をこめて。

P・L・クローシュー 軍医補、第二四病院、二七区

○(一九一七年二月二七日)

『ラ・ヴィ』誌にお寄せくださった、大変ご好意に満ちあふれ、また日本の詩についての洞察に富んだ論文に対し感謝申しあげます。またご高著の『マダガスカルの通俗詩』をどれほど楽しませていただいたか、お伝えすることができないほどです。それはマダガスカルとその香りそのものです。その中には真の「ハイカイ」といえるものがありました。

これらの書簡から、両者の交流はポーランの論文「日本のハイカイ」と著書を介していること、クローシューは自著『アジアの賢人と詩人』に対するポーランの批評を、「日本の詩について洞察に富ん

だ si pénétrant pour la poésie japonaise」ものであると謝意と賛辞を述べつつ、将来ポーランに会えることを期待していることがうかがえる。

一方この書簡に記されている日付けや住所から、クローシューが大戦中、エベルネーの病院で軍医補の任務にもあたっていたこと、多忙な時期にもかかわらず、ポーランの著書を熟読して、そこに日本のハイカイに通底する魅力を発見するなど、なおハイカイや文学への情熱を抱いていたことが明らかとなった。

それでは論文「日本のハイカイ」の要点を紹介しよう。

ポーランは、論文中でクローシューの書に示されている俳句の特性や仏訳を紹介し、彼自身の俳句観やフランス・ハイカイについて触れた上で、さらにクローシューの俳句紹介の特徴や功績についても画期的なことを記している。

ポーランによる日本の俳句についての紹介をいくつか挙げる。

(1)日本のハイカイは「庶民の詩 La poésie populaire」であり、「細部、小さいもの、つかの間のものを切り取り、探究し、さっと捉えている」。(2)「短い驚きはハイカイの本質である Un court étonnement est l'essentiel du haï-kai」ハイカイは「純粹な感覚にぎりつめられ、そこに何かが付加されるのを慎む詩 La poésie réduite à la sensation pure, et se défendant de lui donner une suite」。「抒情性を侵す西洋の雄弁を告発してやまなかつたステファヌ・マラルメ

がもし「ハイカイ」を知っていたら魅了されたことであろう」。(3) 一三句の仏訳、原句や作者名を明記していないが、蕪村が最も多く六句（「追剣を弟子に刺けり秋の旅」他）、他に各一句（芥境、鬼貫、鈴竿、貞室、一茶、伝芭蕉、伝其角）がある。(4) 芭蕉については特別に作者名をあげて「彼自身は全き神秘主義者」と紹介している。ちなみに『N・R・F』誌上で俳句の特性の一つを、神秘的 mystique と云っている。

ポーランは日本の俳句を「文人の詩」よりはむしろ、「叫び」、「表出」、「単語」に近いととらえている。<sup>(5)</sup>

またフランス・ハイカイについて「簡単に作れる」ことをあげ、大戦中の戦場の光景をハイカイ形式で初めて表現したヴォカンスの作品を引用して大戦の影響が言葉に表れていることを指摘し、「ハイカイの主題に関して提起されうる問題はもっと複雑である」ことも述べている。

その上で、クーシュエの仏訳紹介の特徴について、魅力的であり、「日欧の人々が共有する感動の言語を創造すること créer un langage d'émotions commun à l'Européen et aux Japonais」が問題となっていることを指摘している。そしてクーシュエのハイカイ紹介の功績について「ハイカイによって全人類が参加することが現実となるならば s'il est vrai que s'ébauche une vie commune à laquelle participera l'humanité entière」<sup>(6)</sup>「クーシュエは「情熱的

で鋭敏な働き手」の一人としてラフカディオ・ハーンに匹敵しうる」と評価している。

以上によって大戦中にクーシュエの著書を読んだポーランが、ハイカイに魅了され、そこに普遍的ポエムを感得したことがうかがえる。

2 ポール・エリュアール (Paul Eluard 1895-1952) における受容とハイカイの創作

ダダ、シュールレアリスムの詩人としても知られているエリュアールのハイカイ作品が『N・R・F』誌に一篇掲載されている。エリュアールの「新しい詩的世界の現出には間接的に日本の俳諧が関係していたのではないか」という示唆や、彼の詩作品と蕪村の俳句のクーシュエ訳との比較の論考は、すでに平川祐弘他<sup>(7)</sup>によってなされていた。しかしエリュアールの俳句受容の具体的な経緯、「伝記的・書誌的事実」についてはほとんど不明であった。

その経緯と彼のハイカイ作品をポーランとエリュアールの書簡を通じて以下に紹介する。

ポーランのエリュアール宛の手紙には、注目すべき追伸が記されている。

○（一九一九年二月曜日付）

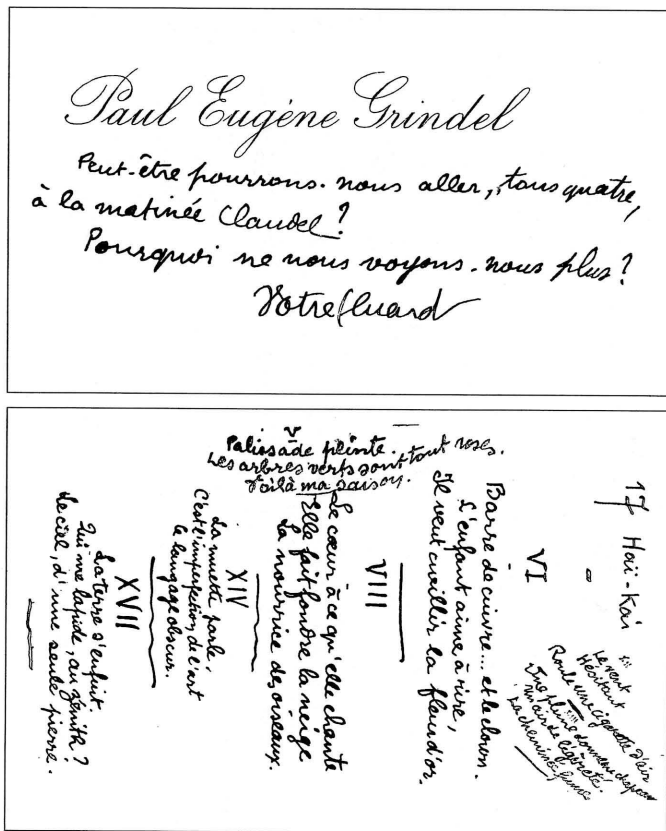


図5 ポール・エリュアールのハイカイ作品が書き込まれている名刺の表(5-①:上)と裏(5-②:下) —ポーラン宛、1919年5月。(ポーラン・アルシーフ、I.M.E.C所蔵)

P・L・クレーシェーを知っていますか？ おそらくね。で、ポール・ヴァレリーは？「方法」(methodes)のヴァレリーですよ。

エリュアールも翌月、ポーランに書いている。

○エリュアールからポーラン宛(一九一九年三月一〇日)

彼(ヴォカンス)は『アジアの賢人と詩人』を私に勧めてくれています。どこで手にいれることができるでしょうか？

ポーランはこれに対してただちに返事を出している。

○(一九一九年三月金曜日)

パリに来る機会に、以前話したクレーシェーの本、『……賢人と詩人』を貸してあげます。

以上のように、エリュアールと俳句との出会いはクレーシェーの著書を介してであろうこと、エリュアールがクレーシェーの書を知ったのはポーランやヴォカンスの勧めによるものであり、ポーランから借りて読んだことが書簡によって推定される。こうした経緯の後エリュアールはハイカイの創作に取りかかったらしく、自作のハイカイをポーラン宛に自分の名刺に書き込んで送っている。筆者はそのハイカイ作品が流麗な筆跡で書き込まれている名刺(図5)の所在を、ポーラン宛の最初期の書簡(二九一八一一九)の中に確認した。この名刺には日付の記載がなかったが、最近一九一九年五月と推定された。

○エリュアールからポーラン宛(名刺)「一九一九年五月」

名刺の表(写真5-1①)には「Paul Eugène Grindel」「ポール・ウ  
ジェーム・グリンデル(エリュアールの本名)」と印刷されており、  
二行の文面が、署名「votre Eluard」とともに記されている。

Peut-être pourrons-nous aller, tous quatre, à la matinée  
Claude! 「クロードルのマチネーに、四人一緒に、行けるだろ  
う。」

Pourquoi ne nous voyons-nous plus? 「なんで僕らは、近頃  
会っていないんだらう。」

votre Eluard

裏面には「THAI-Kai」と題して、七篇の作品が記されている<sup>(6)</sup>  
(写真5-2②)。おやびへこの題は、一七シラブルのハイカイという  
意である。

## V

Palissade peinte. (5) 色塗りされた柵。  
Les arbres verts sont tout roses. (7) 緑の木々がすっかりばら色だ。  
Voilà ma saison. (5) これぞ我が季節。

ローマ数字の「V」で始まっている最初の一篇は、一七シラブル  
で作られている。

「柵」「木々」によって、とくに最後の三語によって、春の季節の  
到来とその感動が指し示されているように思われる。大戦後初めて  
迎えた春のよろこびを、初めて知ったハイカイ形式で詠んだもので  
ある。

各行にピリオドがうたれ、三行書きの「不連続の詩」la poésie  
discontinue になっている。

次の作品も春の到来の感動が、「鳥たち」と「乳母」という二語  
の意外な取り合わせによる、斬新な言語によって指し示されている  
のではないだろうか。

## VIII

Le coeur à ce qu'elle chante 歌うことに心をこめて  
Elle fait fondre la neige 彼女は雪をとかす  
La nourrice des oiseaux. 鳥たちの乳母。

「風」Le ventは二篇(名刺のローマ数字XIV、XIII)も、身のかわ  
りにある事物をモチーフに春ののどかな気配が、単純化されて、イ  
メージ化されている。<sup>(6)</sup>

XII

Le vent

風が

Hésitant

ためらいつつ

Roule une cigarette d'air

空気のたばこを巻く

XIII

Une plume donne au chapeau

羽毛が帽子に

Un air de légèreté.

軽感をあたえてくれる。

La cheminée fume.

煙突がくゆる。

言葉で表現できない詩の領域に関するハイカイも記されている。

XIV

La muette parle,

啞の女が話す、

C'est l'imperfection de l'art

それは芸術の不完全

Ce langage obscur.

この難解な言語。

これら五篇は『N・R・F』誌に掲載されている。ポーランは、エリュアール宛の返信の手紙（一九一九年五月二九日付と推定）に、VIII「鳥たちの乳母」のハイカイについて、心惹かれたことを記し、自分のハイカイ作品も書き添えている。

エリュアールは、これらのハイカイを五月のいつ頃書いたのであろうか。その日付を特定することは、彼が最初にハイカイ作品を創作した時期と関連し、重要であるので、次の章で触れたい。

3 ジャン＝リシャール・ブロック (Jean-Richard Bloch 1884-1947) における受容とハイカイ創作

『N・R・F』誌にフランス・ハイカイが初掲載される契機を開いたのは、すでに言及されていることであるが、作家ブロックであった(後述<sup>48</sup>)。同誌には彼の一篇のハイカイ作品が掲載されている。ブロックの活動は現在忘れられているが、代表作の大河小説『……会社』(…Et Compagnie, 1918) はNR Fから刊行され、『ヨーロッパ』誌の編集委員として活躍し、またアラゴンと『ス・ソワール』誌編集にも携わっていた。

ブロックもまたクルシューの書に触発されてハイカイの創作をした一人である。ブロックの「カイエ」(注21参照)はフランス国立図書館に所蔵されている。そのNo.11、No.12に『アジアの賢人と詩人』を撰取した痕跡があり、また彼のハイカイ実作一〇〇篇余りが記されているのを筆者は確認することができた。No.11には一九二〇年一月二九日付で同書「序章」中の「日本の抒情的エピグラム」に関連する、俳句と和歌やマラルメについての箇所ほとんどすべてが引用されている(注34参照)。翌三〇日には最初のハイカイ

作品一四篇が、その創作のよろこびとともに記されている。

「クーシューがたいへん美しい例を示している十七シラブルの日本のハイカイの様式にならって、昨晚いくつか短詩を作るのを楽しみました」

その最初の作品を掲げる。

Autour de la maison

家の周りで

Dans la nuit le vent d'hiver

夜 冬の風が

Chante sur deux notes.

二音で歌う。

このハイカイには、冬の夜の寂しい風の音が、二語「deux notes」に凝縮され、ほぼ一七シラブル（六、七、五）で見事に詠みこまれている。

以上、ブロックがクーシューの書を読み、俳句の翻訳に魅了され、

ただちに作句へと至る経緯が少し具体的になった。また同年三月二

〇日付の手紙（編集長リヴィエール宛 後述）には、日本の俳句から思いも及ばない「啓示」を与えられ、「とるにたりない輪郭が内包する暗示力」を感じたことが記されている。

『N・R・F』誌には一九二〇年一月に初めて創作したこの作品を含む一〇篇と二月に作った一一篇が掲載されている。<sup>⑧</sup>

### 三 クーシュー主宰の「ハイジン」の集い

クーシューは、『アジアの賢人と詩人』刊行の後、戦地エペルネーの病院で軍医補の任にあった。しかもその他の分野（キリスト教の歴史研究）で多忙ななかで、なお大戦中から戦後にかけて、フランスの「ハイカイの作り手」（俳人）の交流を深め、「ハイジン」の会合の開催にも努めていた。このことを、クーシューのポーラン宛書簡の後半四通とヴォカンス宛の未発表書簡二通を引いて例証しよう。

#### 1 クーシューの書簡と「ハイジン」の集い

最初に、大戦中、戦地からサンクールの自宅にヴォカンスを招く書簡を紹介しよう。フランスのハイジンの存在や動向が具体的に記されている。

〇（一九一七年七月一五日）

親愛なる友よ セヴァストス夫人<sup>⑨</sup>からの申し出で、今度の土曜日七月二日七時半に、スガン夫人とご一緒に、ごく内輪の夕食ですが、サンクールにある彼女の家―アルマンゴ―通り一九番地（サンクール・サンラザール駅の近くです）まで、お出でいただければ光栄です（お帰りの手配をいたし



ます。新しいもつとも偉大な才能のハイカイの作り手であるルネ・モーブラン（注9参照）がお出でくださることになっていますが、彼はあなたやボンサンやモランに一刻も早く会いたがっており、私としてもそう願いたいものです。どんなご事情があろうともきつとお出でください。フランス・ハイカイの将来がかかっているのです！そして、あなたの既刊ないし未発表のハイカイの全資料をご持参ください。ボンサンは新しい小傑作を私に示してくれました。

以下は、大戦中ポーラン宛に送った続きの三通であるが、「ハイジン」の会合に関わる部分を紹介する。

○（第二九病院、三区、一九一七年二月二七日）

フランス・ハイカイを完成させ、またそれに規則を与えようと努力している二、三のフランスの「ハイジン」が存在するのをご存じでしょうか。彼らは一月か二月にサンクルーに集まるはずで、もしこの集会にお出でいただけましたら、本当に幸せに存じます。

○（一九一八年一月二六日）

私たちの「ハイジン」の集いはまだ開かれておりません。戦争のせいで日本の小さなミュージズの愛好家たちが散り散りに

なっているからです。いつの日にかこの計画中の集会であなたとおめにかかれますでしょうか。

○（病院通り一〇六番地 エペルネー、一九一八年三月二二日）

『ラ・ヴィ』誌上でサビロンの美しいハイカイを読みましたが、その中の一篇はあなたに関するものでした。作品、とりわけ鶏とその影のハイカイは、たいへん日本的に思われまして、また、「蒸気機関車」の作品と同様に、なかなか趣きがあります。作者にお会いできたら、きっと心惹かれることでしょう。おそらくいつの日かフランスの「ハイジン」が集まる機会が訪れることでしょう。

## 2 「初会合」への招待状と招待者たち

大戦が終わり、ついにハイジンたちが集まる機会が訪れた。

ポーラン宛の招待状（図6）である。全文を紹介しよう。

○（ポッゾ・ディ・ボルゴ大通り二番地サンクルー、一九一九年五月八日）

ご友人「サビロン」の魅力的な詩の楽しみをお与えくださりありがとうございます。この小冊子は日本の詩のもつとも洗練されたものに値するでしょう。

来たる日曜、五月一日、あなたに敬意を表して私たちが

6 mai 1919  
2 Avenue Pozzo di Borgo, S. Cloud

Cher Monsieur

Merci de m' avoir donné le  
régal des poèmes charmants de votre ami.  
Le petit livre serait digne du plus expert  
des poètes japonais.

Voilà, vous venez à la première  
réunion des "haïjin" que nous ferons en votre  
honneur dimanche prochain, 11 mai. Nous  
vous attendrons à dix heures à St Cloud (la  
maison est tout près de la gare de St Cloud) - à  
midi 1/4. Venez avec vous aussi de votre  
bon ami Paul Eluard - et Mademoiselle  
Jeanne Paulhan, si il y a au monde cette personne  
qui ne peut être que haïjin elle aussi.

Et me tarde de faire votre connaissance  
et de vous dire mes amitiés précieuses

P. L. Couchoud

P.S. Ouvrez un œil par téléphone N° 00.52.

図6 ハイジンの会合への招待状。1919年5月8日、  
クージュールからポーラン宛。(ポーラン・アルシーフ  
I.M.E.C蔵)

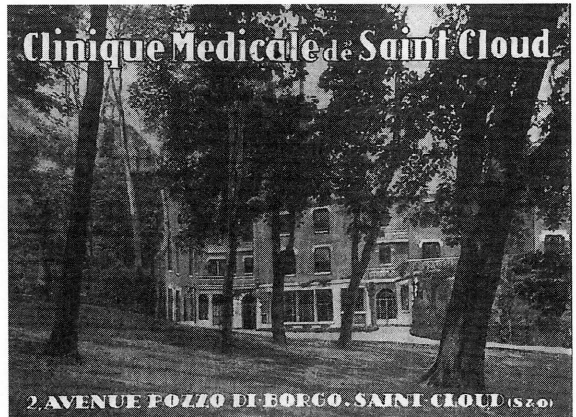


図7 サン・クルーにあるクージュール邸(病院)。こ  
こで1919年5月11日ハイジンの初会合が開かれた。  
(甥、ジャン＝ポール・クージュール家旧蔵)

開く初の「ハイジン」の会にお出でになってください。サン  
＝クルーでの昼食——二時半——にあなたをお待ちしておりま  
す(家はサン・クルー駅のすぐ近くです)。ご友人のポール・  
エリュアール、そしてジャン・ポーラン夫人とお呼びする方  
がいらっしやいましたら、その方も同様に「ハイジン」でい  
られますでしょうから、私たちにかわってご出席をお願いし  
ていただけませんか。

あなたとお近づきになれるのが待ち遠しく思われます。

敬具

追伸、お電話で、承諾のご返事をお願いいたします(オトウイ

ユ〇〇一五二)

P・L・クージュール

クージュールは同日付でサン＝クルーからヴォカンス宛にも招待状  
を送っており、招待者の名が詳しく記されている。全文を、未発表  
資料なので原文もそえて示す。

○ ポZZ・ディ・ボルゴ大通り二番地、サン＝クルー(一九一

九年五月八日)

親愛なる友へ

次の日曜日一二時半、スガン夫人とあなたの可愛いお嬢さんとご一緒に昼食にお越し願えますか。もしあなたがこの申し出をお受けくだされば、フランスの「ハイジン」の初会合を開くこととなります。

モーブランが顔を出しますが、友人のゴバン、ジャン・ポーラン、その友人のエリュアール、そしてひょっとしたらエルヴェ嬢もいっしょのことでしょう。私たちはあなたを非常に当てにしています。ボンサンを私たちに代わってお招きしていただけますか。というのも私は彼のヴェルサイユの住所を知らないからです。

承諾の場合は電話でご一報ください。オトウイユ〇〇―五二です。

スガン夫人には愛情をこめた敬意を、あなたには昔からの友情の思いをお送りいたします。

P・L・クーシュー

8 mai [19]19

2 av(enne) Pozzo di Borgo St.Cloud,

Mon cher ami

Voulez-vous nous faire le plaisir de venir déjeuner diman-

che prochain, à midi 1/2(et demie) avec Madame Seguin et votre délicieuse filleule. Nous allons faire, si vous le voulez bien, la première réunion de "hajin" français.

Maublanc sera là avec son ami Gobin, Jean Paulhan, avec son ami Eluard et peut être Mademoiselle Hervé. Nous comptons bien sur vous. Vousriez-vous inviter de notre part Poncin dont je n'ai pas l'adresse à Versailles (Un coup de téléphone pour dire oui, Auteuil 0052)

J'envoie mon affectueux hommage à Madame Seguin et à vous toute ma vieille amitié.

P.-L. Couchoud

これら二通から、ポーランを主賓とするハイジンの集いが一九一九年五月一日に実現していたことが明らかとなった。当時ダダの詩人として活動中のエリュアールも招かれている。場所はサンルクールのクーシュー所有の病院兼邸宅であった(図7)。

ヴォカンス宛書面を通じて、招待されたのは、ポーラン、エリュアールの他にモーブラン、ゴバン、ボンサン、ヴォカンスを含めて六人である。

戦争中ちりぢりになっていた「日本の小さなミュージズの愛好家た

ち」が、クーンシュー邸での昼食会に初めて集ったのであった。参加者、特にヴォカンスやボンサンなど最初からのハイジン仲間自作を持ち寄って、互いに発表し、フランス・ハイカイの規則についても話し合ったのではないだろうか。

このようにクーンシューは、一九一七年から一九一九年にかけて、フランス・ハイカイにおける「文芸的な精神連帯の場」、「座」(尾形仿『座の文学』角川書店)の結成ともいえる活動もおこなっていた。こうした活動を通じて「ハイジン」仲間の交流を深め、ハイカイに対する文学的情熱を「ハイジン」たちの間に高めていたのである。

### 3 初会合後のエリュアールらの活動

この会合を通じて、エリュアールは、ハイカイ創作の大きな啓示をうけたのではないだろうか。興味深いことには、エリュアールがポーランにハイカイ作品を送り、またポーランもその返事に自作を添えているのは、同年五月末の時期であった。エリュアールがクーンシューの書を知ったのは、三月と推定されるが、さらにこの五月一日のハイジンの会合の後、クーンシューらとの出会いを通じて、ハイカイ創作に取りかかったのではないだろうか。

またハイジンの集いが実現した翌年、一九二〇年一月に、クーンシュー、ヴォカンスの二人がエリュアールの誘いを通じて、ダダの集會に出席している。その跡付けとなるエリュアールからポーラン宛

の手紙の一部を引こう(注19参照)。

この手紙の一部は発表されていたが、日付けの記載が無いため、その時期は、筆者が手書きの同書簡を確認した折には不明であった。<sup>(56)</sup>書面には「ダダの集會」への参加の呼びかけが二ヶ所ある。

○エリュアールからポーラン宛「日付け記載なし、一九二〇年二月初旬(推定)」

来週木曜のアンデパンダン展のダダのマチネーにいらしていただけますか。クーンシュー、とりわけヴォカンスは、また参加するのではないのでしょうか。二人がお出でくださるといいのですが。

Viendrez-vous a la Matinée Dada aux Indépendants jeudi prochain? Pour Couchoud, et surtout pour Vocance, ils reviendront, je les aimerais autant.

手紙の終わりに近い部分の空白には、線で囲ったなかに細かい字で書き込みをしている。<sup>(57)</sup>

ぼくはアンデパンダン展の券をまだ受け取っていません。ところで、二月五日の木曜日のダダの会はいかがですか。

je n'ai pas reçu la carte p(ou)r les Indépendants. Mais

si voulez pour le jeudi 5 février) a Dada

書面「クーシュー、とりわけヴォカンスは、また参加するのではないでしょうか」からクーシュー、ヴォカンスの二人が、最初のダダの集会、同年一月一三日には出席したこと、そしてアンデパンダ展のバリエの第二回の会にも参加してくれることをエリュアールが期待していることがうかがえる。

ハイジンの集いが契機となつて、エリュアールらのハイカイ創作意欲が高まつたこと、またクーシューらとポーラン、エリュアールらの交流が次第に深まつていったことがうかがえる。さらにハイカイとダダという二つの文学運動が互いに交差するところのあったことも考えられるのではないだろうか。

#### 四 『N・R・F』誌「ハイカイ」アンソロジー掲載実現まで

本章では、「ハイカイ」アンソロジーの発刊までの詳細な経緯を『N・R・F』誌の編集長リヴィエールやポーラン、ブロックなどの書簡(六通)を通じて浮き彫りにしてゆきたい。

『N・R・F』誌にハイカイ作品が掲載される口火を切ったのは、

前述したように、作家ブロックであった。彼は先述したように一九二〇年一月末にクーシューの本を読み、啓発されて創作したハイカイを同年三月に編集長リヴィエールに送っていたのである(注48参照)。

##### 1 ブロックからリヴィエール宛(一九二〇年三月二〇日)

(略) 私には、私のハイカイに対するあなたの当惑が理解できません。実際、見かけの極端なまでの簡潔さは、その極端なまでの平凡さに隣あわせなのです。クーシューの本に目を通されましたか(Avez-vous jeté les yeux sur le livre de Couchoud?)。そこにある日本の詩の実例は、この点で興味深く、実に教示的です。(略) ここ二ヶ月の経験によって、私は思いも及ばなかったことの啓示をうけました。それはこの取るに足りない輪郭が内包する暗示力です。

五月初めになって、編集長の返事を通じて、同誌にハイカイのアンソロジーの掲載案が提出されたのである。

##### 2 リヴィエールからブロック宛(一九二〇年五月五日)

こんなにも長い間あなたの「ハイカイ」の件をあいまいなままにしてしまったことをお詫びし、あなたに次のような構成案

を切に提案いたしたく存じます。それはジャン・ポーランのアイデアで、私も大変良いものと思うのですが、『N・R・F』の近刊号のひとつに、フランス・ハイカイの小アンソロジーを掲載するというものです。彼はすでにクーシューから序文を入手しました。エリュアール、モーブラン、ヴォカンス、ブグレの詩篇も掲載されることでしょう。お送りいただいたもの、つまり、傑出した作と私が思っておりますものから選びだすことを、お許しいただけますか？

フランス・ハイカイのアンソロジー掲載の発案は編集長によってではなく、秘書になったばかりのポーランによるものであった。<sup>(58)</sup>ハイジンの初会合から一年後のことである。

次はポーランがハイカイ・アンソロジー構成案の草稿を送った手紙に対する編集長の返事である。

### 3 リヴィエールからポーラン宛（一九二〇年七月三一日）<sup>(59)</sup>

……ハイカイに魅了されました。最初の一読でハイカイのほとんどすべてが秀逸であることがわかります。あなたの作品が断然すぐれているように感じられるとお伝えしても、えこひいきだとはお思にならないように願いたいものです。それらは

——ほとんどの場合——絵画的である以上に心理学的価値 (une valeur psychologique bien plus que pittoresque) があります。いくつかたいへん気に入っているものがあります。それに次いで、「ずっと格が下がるように思われますが」、エリュアール、ヴォカンス(?)、ジャン||リシャル・ブロックのハイカイが来るように思われます。ジャン・ブルトンとは誰ですか(注58参照)。彼はけっこう気のきいたハイカイを作っています。思うにクーシューのハイカイ、『水の流れのままに』と題するものは最初に書かれたものです(作者名がありませんが)。それらは一番目立つものがない作品 (les moins fameux de beaux) です。しかし当然彼のハイカイを掲載しないわけにはいきません。

私の全体的意見は非常にはつきりしています。すなわち原稿をこのまま印刷に回さなければなりません。そしてもしブルーストも(それが確かなように)、マックス・ジャコブも九月号のためにわれわれに何も提供できなかったら、それを巻頭に持つてこなければなりません。お書きになった短い巻頭言は完璧ですので、ご署名してくださることを望みます。

『N・R・F』誌の優れた編集長(一九一九―二五)として知られているリヴィエールが、ハイカイに魅了され、「ハイカイが秀逸」

であることを認めていること、さらに、本来ならブルーストカ詩人マックス・ジャコブが飾るはずであった同誌の巻頭に、まだほとんど知られていないハイカイを置くという提案は、フランス・ハイカイに対して二〇世紀文学の新しい方向を示すものという期待をリヴィエールが抱いたことを示しているように思われる。またポーランの作品を「心理学的価値」の視点から最も高く評価している一方、クーシューに関しては、しかし作品に対してではなく、ハイカイ創作の先駆的な功績に対して評価がなされている。

ポーランは編集長からの返事を受け取ってから五日後、クーシューを筆頭に九人の作品を記したハイカイ・アンソロジー構成案の草稿をヴォカンス宛に送っている。

#### 4 ポーランからヴォカンス宛（一九二〇年八月四日）

ジャック・リヴィエールは小ハイカイ集の方針を受け入れており、それは九月一日号の誌面に掲載される予定です。このハイカイ集が以下のように構成されるということでもよろしいでしょうか——

ハイカイについて紹介一ページ。

P・L「ポール・リール」・クーシューのハイカイ一篇（『水

の流れのままに』／あなたのハイカイ一篇（私が格別気に入っている「サーカスにて」を選んでよろしいでしょうか）

そして、アルファベット順に——

P・A「ピエール・アルベール」ビローのハイカイ四篇（『おあつらえの詩』／ジャン・リリシャル・ブロックのハイカイ一篇（『ポワトゥーの家』／ジャン・ブルトンのハイカイ五篇（ブグレ）（注58参照）／ポール・エリュアールのハイカイ九篇（『ここに生きるために』／M「モーリス」ゴバンのハイカイ二篇／ルネ・モーブランのハイカイ一篇（『風景』／J「ジャン」ポーランのハイカイ五篇（『見つけし物』）

紹介文は以下のとおり——「クーシューのもとに、八人のハイカイの作り手たちが初めてここに集い、分析の道具を仕上げようと努める。それがどんな冒険かは知らないが、幾多の冒険がフランス・ハイカイを待ちうけているだろうと彼らは少なくとも考えている——フランス・ハイカイは、例えばかつてマドリガル、あるいはソネットが得たたぐいの成功をもたらすのではないだろうか（qui pourrait rencontrer）。——またそれによって共通の趣味が形成されるかもしれない」

以下のように書いたあなたのご友人の名前をもう一度知らせ



ていただけますか。

Le banc de pierre est trop froid 石のベンチはひどく冷たい

Le banc de bois est mouille 木のベンチは濡れている

Rendez-vous d'automne<sup>(2)</sup> 秋の待ち合わせ

彼の他の詩も提供してくださいませんか？ (後略)

ジャン・ポーラン

もう数日のあいだあなたのハイカイのすべてを手元において  
もよろしいでしょうか。まずは私たちのアンソロジーがどのよ  
うに迎えられるか見極めたいのです。ジャック・リヴィエール  
はそれを巻頭に置きたいと望んでいます。(後略)

「ハイカイ」アンソロジー発刊に至る直前の二通を引こう。

次は未発表書簡なので原文も添える。

5 ポーランからヴォカンス宛〔一九二〇年〕八月一〇日消印<sup>(2)</sup>

これがあなたの校正刷りです。恐れ入りますが、それを再読  
していただけますか(よろしければ、日付けもおつけください)  
『N・R・F』の校正係りにあなたが先であることを思い出すませ

す)。

小アンソロジーに入れるには少し遅くなって、ボンサン氏の  
ハイカイを受け取っています(しかし、それらの作品は我々が掲  
載する二篇より劣っているように思われます)。厚くお礼申しあげ  
ます。私の催促をお許しください——しかし、我々の小アンソ  
ロジーを九月一日の『N・R・F』の巻頭に掲載するという好  
機をのがさないことが重要です。長い間訪れることのなかった  
機会なのでから。

Ce 10 Aout [1920]

Cher Monsieur

Voici vos épreuves. Vous voudrez-vous être assez aimable pour  
les revoir (et les dater, si vous y consentez, d'une date qui  
rappelle aux lecteurs de la NRF votre priorité)

Je reçois, un peu trop tard pour les joindre au petit recueil,  
les haïkaïs de M. Poncin (Ils me semblent d'ailleurs bien  
inférieurs aux deux que nous donnerons) Je vous en remercie  
vivement, je m'excuse de ma hâte -, mais, il s'agissait de ne  
pas laisser échapper l'occasion, qui peut-être ne se fût pas  
représentée d'assez longtemps, de donner notre petite antho-  
logie en tête de la NRF du 1<sup>er</sup> septembre.

6 ポーランからヴォカンス宛（月曜日 一九二〇年八月一五日）

あなたのハイカイとボンサンのもので。小アンソロジーは九月一日の『N・R・F』の巻頭に掲載されることでしょう（あなたの印象や批評を待ちきれずにおります）。

五 「ハイカイ」アンソロジー掲載とその反響

このようにポーランの編集を通じて、その熱情的な働きとヴォカンスの協力によって、またリヴィエールの大きな支持を得て、「ハイカイ」アンソロジーは翌九月一日に、『N・R・F』誌八四号の巻頭を飾ったのである。

1 『N・R・F』誌八四号と「ハイカイ」アンソロジー

同誌の表紙の目次には、冒頭の中央に「ハイカイ」と大きく記され、ポールルイ・クーシューを初めとしてジュリアン・ヴォカンス、ジョルジュ・サピロン順に二人の作者名が掲げられている。その下に二〇世紀文学を代表する作家、批評家である四人の執筆者、ルイ・アラゴン、アンリ・ド・モンテルラン、アンドレ・ジイド、アルベール・チボーデが名を連ねている。裏表紙には編集長ジャック・リヴィエール、秘書ジャン・ポーランの名が見える。

ポーランの記した短い前書きがある。前半には八月四日付のヴォカンス宛の草稿にはなかった日本の俳句についての短い解説があるが、クーシューの書からの撰取である。

「一三〇〇年にわたる日本の詩歌は、ほぼ、このような小片から成り立っている」として、「小片の詩」（注30参照）ともいえる定型の短詩が、日本には何世紀にもわたって続いていることに驚嘆をこめて紹介している。また「ハイカイは絵画的 *pictoresque* であり、あるいは神秘的 *mystique* である」と前置きして、鳥、虫、花をモチーフとした俳句三篇がクーシューの訳として、出典『アジアの賢人と詩人』も記され、引用されている<sup>(31)</sup>。

後半は、アンソロジーの紹介文である。草稿とほぼ同一であるが、最後にフランス・ハイカイが将来「一層決定的な作品の到来」をもたらすことを希望する旨の一文が追加されている（添付資料「ハイカイ」参照）。

作者は、大戦で戦死したサピロンと「初会合」の出席者の一人であったボンサン、そしてルフェーヴルの三人が草稿に追加されて、二人となった。

『水の流れのままに』——一九〇三、ポールルイ・クーシュー（一篇<sup>(32)</sup>）／『サーカスにて』——一九一六年五月、ジュリアン・ヴォカンス（二篇<sup>(33)</sup>）／『詩の微粒子』——一九一八、ジョルジュ・サピロン（五篇）／『おあつらえの詩』、ピエール・アルベール・ビロー

(五篇)<sup>6</sup>／『ポワトウの家』、ジャン・リリシャル・ブロック（一篇）／ジャン・ブルトン（六篇）／『ここに生きるために』ポール・エリュアール（二一篇）、モーリス・ゴバン（二篇）／アンリ・ルフェーヴル（二篇）／アルベル・ボンサン（二篇）／ルネ・モーブラン（二一篇）／ジャン・ポーラン（六篇）

前書きには、アンソロジーを編集したポーランの意図が示されている。一つにはクーシュエの先駆的業績を初めとするフランス・ハイジンの作品を紹介することであり、「クーシュエのもと、ハイカイの作り手一〇人が初めてここに集い、分析の道具を仕上げようと努める」ことが記されている。「分析の道具 un instrument d'analyse」とは、ハイカイ全般を指しているように思われるが、ヴォカンス著『ハイカイの本』（後述）にも、ハイカイは「分析の成果」「心の詩」であり、「心理探求の手段」などの言及がある。このようなハイカイに対する見解には、リヴィエールの手紙にもハイカイの「心理学的価値」に重点がおかれていたように、ヨーロッパ的俳句観が示されていて興味深い。ポーランが選んでいるハイカイには、日本の俳句のように自然を素材とした簡潔な作品も含まれているが、ヴォカンスの『サーカスにて』を初めとして、「人事」にあたる作品が多い。また心理描写を凝縮している作品が個々の作者のなかにかなりみられる。たとえば『サーカスにて』の八番目や最後の作品、サビロンの二番目、アルベル・ビローの三番目、エリュアールの

九番目、モーブランの八、九、一〇番目、そしてポーラン自身の四、五、六番目などである。前書きには将来ハイカイが新しい詩のジャンルを開くことへの冒険や希望、まだ定まっていないうハイカイにたいするフランス人の共通の意識の形成、そして「一層決定的な作品の到来」の期待も示されている。

## 2 アラゴンの書簡

「ハイカイ」刊行直後、同誌を通じて初めてハイカイを知ったりルケはその感動をいち早く手紙に書いていたが（注10参照）、同誌執筆者の一人でもあったルイ・アラゴンは、皮肉をこめた批判をポーラン宛に書き送っている（注6参照）。

アラゴンからポーラン宛 「一九二〇年九月六日消印」

ハイカイは私を魅了します、といっても文学に達しているとは思えませんが (Les Haï-kais m'enchantent : en deçà de toute littérature)、しかし何という実験でしょう。あなたを加えて一〇匹「実際には「二人」のモルモットです。簡潔さに心を奪われている者もいれば、三行あとに別の三行が続くようないんちきをする者もいます。日本のことも脚韻も忘れることのできない者もいれば、三行句で絵葉書を描写したのと違いがわからないようなハイカイを作る者もいます。詩の古くさい考えが駆け足

で戻ってきます。「彼らは」新印象主義者ですが、それは人が新マルサス主義者と言うのと同様です。(後略)

「簡潔さに心を奪われている者」とはエリュアールやブロックなどを、「脚韻も忘れることのできない者」とはヴォカンスを、「絵葉書」のようなハイカイを作る者とはクーシューなどを指しているのかもしれない。ハイカイ詩人のレベルは、まだ、俳句の真似ごとをしている「モルモット cobayes」であり、浮世絵などから影響を受け、一九世紀絵画の革新を成し遂げたフランス印象主義者には及ばない、「新印象主義者 Les neo-impressionistes」のようであるとアラゴンは批判しているのではないだろうか。ポーランの希望に對しても、「私にとっては、あなたがハイカイに對するあの配慮、そして将来の活動の希望を装っているとしか思えない」と、冷淡な態度を示している。これはハイカイに對する当時の一部の反応でもあったであろうが、アラゴンは「しかし何という実験でしょう」といつてハイカイの出現に驚きも表明している。

### 3 一九二〇年代——フランス「ハイカイ年」

このアンソロジー掲載の実現には、ポーランらの熱情的な働きがあったが、準備期間は必ずしも十分とはいえず、クーシュー、ヴォカンスの先駆的なハイカイ作品の発表年代に関わる小さな誤りもあ

り、ハイカイ作品の質や量にもまだ不足するところがあったかもしれない。しかしこのアンソロジーには、日本のハイジンの魂を実践して船旅に出かけ、その印象を、簡潔な三行のハイカイ形式で初めて実作したクーシュー、戦場の光景を初めとしてサーカスなど新しい素材を次々と削ぎ落とした三行のハイカイ形式で表現したヴォカンス、珠玉のハイカイを遺して戦死したサピロン、大戦後の春のよるこびをかるやかにハイカイに凝縮したダダの詩人エリュアール、日本の俳句に啓示をうけて五七五のシラブルも遵守して多くのハイカイを創作し、「ハイカイ」掲載の口火を切ったブロック、またハイカイに人類的ポエムを予見し、このアンソロジーの編集と掲載をひたむきに手がけたポーランなど、彼らのハイカイに對する情熱が浮き彫りにされている。

この「ハイカイ」掲載の実現した一九二〇年を、フランスの文芸批評家バンジャマン・クレミューは「ハイカイの年」と呼んでいた(注7参照)。この「ハイカイ」掲載が導火線となつて、一九二〇年代には、クレミューなどフランス文学界から注目され、クーシューを驚嘆させたヴォカンスの「詩法 Art Poétique」(注8参照)などの優れたハイカイ集やこの「ハイカイ」アンソロジー中のポーランの前書きなどを再録した序文を付して、ルネ・モーブラン編集による「二八三ハイカイ選集」(注9参照)(図8)などが次々と発表された。同選集には四八人のハイカイが紹介されている。しかも二四

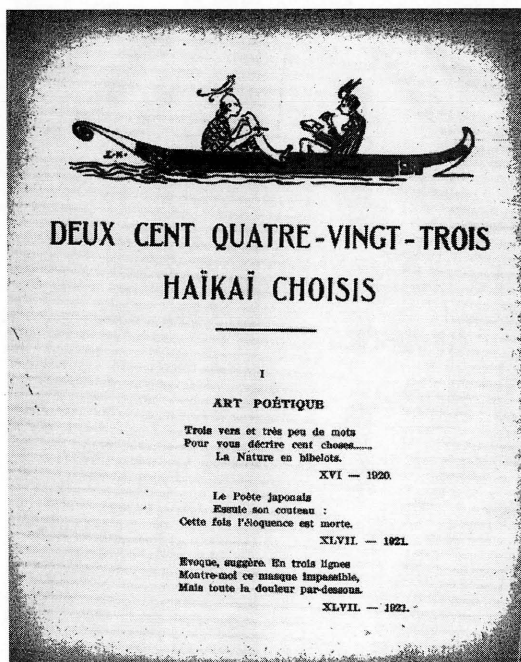


図8 ルネ・モーブラン編集による「二八三ハイカイ選集」  
Deux cent quatre-vingt-trois Haïkaï choisis (Le Pampre, 1923) (フランス国立図書館蔵)

の部門に及ぶ選集であり、「詩法」からスタートして、「心」の部門に「心」で完結している。その「心」の部門には、『N・R・F』誌に掲載されていたエリュアールやポーランを初めとするハイカイ七篇も選ばれている。

この選集の冒頭にはヴォカンスのハイカイ集「詩法」から名前が採られ、その二篇が引用されている。

Le Poète japonais      日本の詩人  
Essuie son couteau :      短刀を拭いた。  
Cette fois l'éloquence est morte.      今度こそ「冗辨」は死んだ。

Evoque, suggère. En trois lignes      喚び起せよ、暗示せよ、三行の中に、  
Montre-moi ce masque impossible,      かの冷然たる顔付きを、  
Mais toute la douleur par-dessous      されど心の底の苦しみを、餘すなく。

(後藤未雄訳「仏蘭西俳諧詩の運動」、第二次『明星』、一九二四)

これらの作品にはヴォカンスのフランス・ハイカイ詩に対するヴィジョンが示されている。それは、日本のハイカイの本質である、簡潔さを通じて人間の心の奥深くを三行の中に凝縮してゆくことである。

クレミューは、このハイカイを引用し、フランス文学にハイカイを導入する理由の一つとして、ハイカイが「雄弁の首をしめあげ」、「純粹な詩の凝縮を提供することなどを指摘している(注7参照)。

この「詩法」に「驚嘆し、魅了された」クレーシューの手紙を紹介しよう。

○ クレーシューからヴォカンス宛(ヴェルサイユ、サン＝シャルル通り一六番地 一九二二年七月二日)  
親愛なるすばらしい友よ  
あなたの類い稀な、すばらしい「詩法」を送っていただきあ

りがとうございました。

これはハイカイの憲章 (la charte) であり、同時にそのもつとも輝かしい証明です。あなたは、簡潔な詩をきわめ、そのゆたかな資源に驚嘆した偉大な日本のハイジンの血を引いています。あなたは詩を純粹な感覚に、生まれいずる感覚に近づけましたが、この感覚こそ詩のもつとも生き生きとしたもつとも確かな源と言えるでしょう。

あなたがフランス・ハイカイに導入した偉大な技法のすべてに驚嘆し、魅了されました。

後藤末雄も、著書『ゴンクールと日本美術』（北光書房、昭和18）において、上記のハイカイを引いて後者について「この一句はフランス俳諧詩の詩學であると同時に我が俳道の標燈であろう」と特記している。

#### 4 一九三〇年代——フランス・ハイカイの衰退及びヴォカンスの『ハイカイの本』の刊行

一九三〇年代以降、ハイカイへの関心は次第に弱まってゆく。三〇年代に入ると、ナチズムが擡頭し、第二次世界大戦が勃発してゆく時代背景も一因と考えられるのではないだろうか。ヨーロッパは再び暗雲に覆われてゆき、芸術革新運動から、行動の文学の時代へ

と移行してゆく。エリユアールは共産主義の活動にかかわっていった。

なおそのような時期に、一九三六年に虚子が渡仏し、クーシューやヴォカンスら数人のフランスのハイジンたちは、日本の俳人と初めて交流する機会を持った。虚子歓迎茶会が催されて、出席者の寄せ書きが虚子に贈られ、クーシューも自筆でハイカイを記している<sup>⑧</sup>。大戦の二年前、最後のパリ句会は一九三七年四月に「当時仏詩壇の巨匠として有名なフェルナン・グレグの主宰で催され」、「文壇を初めとする六十余名の著名人の出席者があり、クーシューやヴォカンスなどの顔もみられ」、即興のハイカイも披露された盛大なものであったことが報じられている<sup>⑨</sup>。

また、生涯にわたりハイカイの創作に情熱を傾け、多くの作品を発表し、一九三七年にその集大成を『ハイカイの本』(Le Livre Des Hai-Kai) に結実させたのはヴォカンスである。同書の前書きは、クーシューと読者への「手紙—序文」となっている。クーシューに向かつておおよそ次のように記されている——「ハイカイ、あなたがそれを、当時の呼称の三つの中からこの名を選んで、ハイカイの代父となったのです。あなたが、ハイカイに、我々の言語でその最初の文学表現を与えたのです。一九〇五年、彫刻家アルベール・ボンサンと画家アンドレ・フォルとともに運河の旅をした思い出、『水の流れのままに』という小冊子を作って。あなたが、『アジアの

Comme toi, Guerrier qui t'appliques  
 Dans les flammes de ton secteur,  
 Jean Paulhan, j'ai résolu publiques  
 Mes amonitions de la terre.

Et an suivant, ô faveur insignée  
 Frémissements de notre entrevue,  
 Nous mêlions nos plumes de cygne  
 Sur les ondes de ta phrase.

Tu soutiens ce montreur de rimes.  
 « Que nous veut ce fou à lier ? »  
 Mon dément, ces heures sublimes  
 N'est pas près de les oublier.

Et la Vie, à la fin, sépare  
 Ceux qui elle rassemble, à Saint-Flour,  
 Tourter de Couchoud, Guardol...  
 Mais où sont Edward, Couchoud ?...

### LE LIVRE DES HAÏ-KAI

En l'honneur de tes Fleurs de Corbe,  
 Beau sujet pour analyser,  
 Et ta plume lisse les barbes,  
 Jamais bas de subtiliser.

Mais, Paulhan, qu'en toi reparais-je  
 Pour un jour, le léger amant  
 De la fleur qui, dans ta jeunesse,  
 Souriait, rouler sur torrent !

Mon mise camarade d'écoute  
 Qui slops me jugs, jugs-moi  
 Sans parler. L'attente, le doute  
 Passent les supplices, chinois.

Que ce passe et oleïa  
 Loin, ain, Panthom ! Puisse-t-  
 Il être silencieux. Sur à notre  
 cœur comme il l'ut au mien !

Julien Vocance

図9 【ハイカイの本】 Le Livre des Haï-Kaiの扉に記されている著者ヴォカンス手書きのポーラン宛の献辞。(ジャクリヌ・ポーラン図書館蔵)

段であるハイカイが、いつか我々に、シュールレアリスムでは到達不可能と明らかとなった秘宝の鍵を授けてくれる可能性がありうるのではないだろうか？（しかしながら、シュールレアリスムはハイカイにおそらくは多くのことを負っているのではないだろうか、エリユールよ？）

#### 5 ヴォカンスの献辞と「ハイカイ」掲載の回想

ポーランのもとに遺されている一つの貴重な未発表資料がある。ヴォカンスがポーランに献呈したこの『ハイカイの本』に付された手書きの献辞である(図9)(注20参照)。四行八連からなるこの長い献辞の二連、三連、四連にはこ

う記されている。

賢人と詩人』の序文でアナトール・フランスが認めているように説得力に富んでいて、この文の筆者に、一九一四年の戦争の間、己の塹壕の印象をハイカイによって表現する着想を与えてくださいました」

また読者に向けて次のように書かれている——「ハイカイは、ある時は辛抱強い分析の成果であり、ある時は内面的ひらめきの即座の筆写です。それは、文学の領域において、かつて試みられた総合のもっとも大きな努力を実現していると我々は考えるのです。心の詩であるハイカイは、我々の時代の痛手のひとつであるあの行きすぎた知性偏重から回帰するであろう日のために、無尽蔵の蓄えをなしているのです——、(中略) すぐれて、内的独白の心理探究の手

L'an suivant, ô faveur insignée ! / Frémissements de notre  
 entrevue, / Nous mêlions nos plumes de cygne / Sur les  
 ondes de ta Revue. 「あくる年、なんとる幸運、出会いにうき  
 ぶるえ、僕らは交えていたのだ、それぞれの白鳥のペンを、君  
 の雑誌【N・R・F】の波紋の上に」

Tu soutiens ce montreur de rimes, / «Que nous veut ce fou  
 à lier?» / Mon dément, ces heures sublimes, N'est pas près de  
 les oublier. 「君はこんなみせかけ詩人を擁護した、『こんな阿



呆、どうしたらおとなしくなるだろう」「我が阿呆もあの至高の時を、たえて忘れず」

Et la vie, à la fin, sépare / Ceux qu'elle rassemble, à Saint-Cloud, / Autour de Couchoud : Eluard... / Mais où sont Eluard, Couchoud ?... 「そして、人生、最後には、ちりぢりにする、一度は集う者たちも、サンクールのクーシューのもとに、エリュアールなど、それにしてもエリュアール、クーシューは、今どこだ………」

そして六連には、『N・R・F』誌に掲載されたポーランのハイカイに触れて、

Mais, Paulhan ! Qu'en toi repaïsse / pour un jour, le léger  
amant / De la fleur qui, dans ta jeunesse / Souriait, roulée au  
torrent ! 「でも、ポーラン！ 君の青春時代に早瀬に流されながら、微笑んでいた、あの花を愛した軽やかな恋人がいつか再び君のなかにあらわれますように！」

この献辞から、クーシュー邸でのハイジンの集りにはポーランやエリュアールが参加していたことが跡付けられ、そして『N・R・F』誌に「ハイカイ」の掲載が実現した年が、「至高の年」ces

heures sublimesであったこと、ヴォカンスがハイジンの集りや「ハイカイ」発行をかけたがえのない出来ごととして大事にしていたことも明らかになった。彼の論文や書簡<sup>⑩</sup>にも、一九一九年から一九二〇年にかけて「ハイカイ」掲載が実現してゆく「至高の年」を幾度も回想し、またかつてのサンクールの会合を再現すべく幾度も文学的集いを催している。

#### むすび

以上、クーシューを中心として資料を検討することによって、彼の俳句活動の全容、俳句の紹介と創作の他に、ハイジンの会合を主宰していた事情が明らかになった。クーシューは『アジアの賢人と詩人』の刊行後、軍医の任にありながら、こうしたハイジンの会合の開催にも心を傾け、一九一九年五月にサンクールの自宅で「初会合」を催した。フランス・ハイカイにおける「座」の結成ともいえる活動もおこなっていたのである。

大戦中に刊行された『アジアの賢人と詩人』は、クーシューの日本体験を通じての俳句発見、詩歌のジャポニスムの書ともいえるもので、俳句を、浮世絵と対比し、日本の芸術として、普遍的な詩の視座からも紹介している。同書は、大戦を体験し、新しい芸術を希求していたエリュアールやポーランらフランスの詩人や作家たちを魅了し、「ハイカイ」という新しい詩へのヴィジョンを与え、ハイ

カイ創作を啓示した。

クーシューが主宰したハイジンの会合には、ポーランやエリュアール、またヴォカンスら最初の俳人仲間たちが結集したこと、この活動の成果は、ポーランらの努力とあいまって、大戦後のパリにおいて、ダダの芸術革新運動が展開されていた時期に、『N・R・F』誌「ハイカイ」アンソロジー掲載へと発展したことが浮き彫りにされた。

同アンソロジーは、クーシューの多面的な俳句の紹介活動を介して日本の俳句の移入と受容が本格化する二〇世紀前半までのポーランらによる「文学的情熱の年代記 la chronologie d'une passion littéraire」<sup>(22)</sup>と言えるのではないだろうか。

同アンソロジー発刊の背景には、「ハイジンの初会合」に参加したポーランの体験が反映しているように思われる。その前書きに「クーシューのもとに、ハイカイの作り手一〇人が集い」と記されているように、ハイジンの集いの招待者六人全員を含む作者の作品がクーシューを筆頭に掲載されている。前書きには、クーシューの書や会合から啓示をうけたポーランの詩へのヴィジョンが、またハイジンたちの新文芸への情熱が反映していることもうかがえる。

またポーランはフランス・ハイカイが、浮世絵がフランス絵画に革命を促したように、将来詩の分野に革新をもたらす可能性を予見して、クーシューをはじめとするハイジンの活動を文壇にい

ち早く提示したかったのではないだろうか。

クーシューによってフランスへ運ばれた俳句の種は、特に大戦中から戦後にかけて、ヨーロッパの荒地のなかでフランス・ハイカイという詩の花となって次々と開花した。そこには日本の俳句が新しい詩の地平を開いてゆく、詩歌のジャポニスムの開花の軌跡も垣間見られる。

クーシュー来日一〇〇年の年に、フランスでは、その俳句紹介の先駆的活動の成果が、翻訳(論文「ハイカイ」と創作『水の流れのままに』)の両面から、一世紀ぶりにそれぞれ一冊『ハイカイ 日本 抒情的エビグラム』<sup>(23)</sup>と『水の流れのままに』(最初のフランス・ハイカイ)として刊行された。その画期的なクーシューの俳句紹介はなお今日的な関心を担っている。さらに『N・R・F』誌以来といわれる八〇〇篇の『フランスのハイク・アンソロジー』も上梓されている。<sup>(24)</sup>

#### 付記

貴重な資料をご提供くださった、クレール・ポーラン、ジャクリヌ・ポーラン、クロード・ブロック、ジル・ポーベルチエ(アルベール・カーン博物館)、フィリップ・ロドリゲス、パトリック・ブランシュ、そして故ジャン＝ポール・クーシュー(クーシューの

甥) 諸氏、資料解説のご教示をくださったベルナル・バイヨ、エマニュエル・ロズラン、竹内信夫、藤田省一諸氏、また貴重な資料の収集にご助力くださった現代出版資料研究所 I・M・E・C、フランス国立図書館、フランス国立史料館に、そして「ハイカイ」アンソロジー全訳に際してご教示くださった松島征、ジュリアン・フォーリ、四ツ谷龍諸氏に深謝申しあげます。

本稿が成るまで、昨年一月急逝された恩師故ジャン・ジャック・オリガス教授(フランス国立東洋言語文化研究所)に格別なお導きをいただきました。ここに本稿をご霊前に捧げます。

注

(1) 『アジアの賢人と詩人』(Sages et Poètes d'Asie, Calmann-Lévy, 1916) は、クーンシュエの二度にわたる来日によって成立したが、主に「世界周遊」給費生しての一九〇三年から一九〇四年にかけての九ヶ月間の初来日体験によっている。滞日の折に寄寓先のクロード・ウシュエヌ・メートル(後述)を介して日本古典詩歌を学ぶと同時に、日露戦争下の日本社会を見聞する機会があった。帰国後、俳句の仏訳紹介論文「ハイカイ Les Haikai」(Les Lettres, 1906)を發表。一方医学の道に進み、医学博士となる(博士論文「原発性無力症[L'Ashténie primitive], Thèse pour Le Doctorat en Médecine, (Faculté de Médecine de Paris, Librairie Félix Alcan,

1911)。二回目の来日は、一九二二年である。再来日は、医学研究 [Kubisagari (Maladie de Gerier), La Revue de Médecine, Félix Alcan, 1914, p.241-296] にも携わったことが最近確認されたばかりであるが、「世界周遊」時に手がけた論文を「一冊の本」にまとめる契機となった。中国(孔子廟)を訪れ帰国。帰国後同書を刊行。同書は自著の序と四つの章から成り、二章「日本の抒情的エピグラム」他に一章「日本の情趣」(初出「日本の文明」一九〇七)、三章「戦争に向かう日本」、四章「孔子」がある。同書は五版を重ね、四版と五版にはアナトール・フランスの序が添えられている。同書に「ついで」第四版 (Paul-Louis Couchoud, Sages et Poètes d'Asie, Préface de Anatole France, Quatrième édition, Paris, Calmann-Lévy, 1923) の邦訳『明治日本の詩と戦争』(改題)(金子美都子・柴田依子共訳、みすず書房、一九九九)、著者については、巻末の「柴田依子編ポール・ルイ・クーンシュエ年譜」参照。なお、本稿の引用は、邦訳『明治日本の詩と戦争』によるが、一部筆者が修正した。「日本の抒情的エピグラム」については、先行邦訳として、堀口久萬一訳、ポール・ルイ・クーンシュエ氏著「日本の俳句の研究」『雲母』(昭和八)、また春山行夫「フランス俳諧派の俳句論」ポオル・ルイ・クウシュウ(特輯)『句帖』(昭和一四)があり、春山行夫は「ミシユル・ルヴォンの『日本文学選集』などのフランス訳俳諧と、クウシュウの訳を比較すると、前者は日本の俳句的な雰囲気を残そうとしているのに反して、後者がフランス的な俳諧と独自性をつくらうとしている相違がよくわかる」と指摘している。

(2) クーンシュエは、一九〇二年度の第三回「世界周遊」パリ大学給

費生(後のアルベール・カーン世界周遊給費生)として選出され来日した。フランスの銀行家アルベール・カーンは世界周遊旅行給費制度設立を目的として、一八九八年にパリ大学に、最初は全く匿名で基金を、一九〇五年「世界周遊協会」設立まで提供した (Bulletin de la Société Autour du Monde (Fondation Albert Kahn), Avril 1914, p.155)。

この給費は一八九八年から一九一四年、次いで一九二〇年から一九三〇年にかけて授与された。設立第一回、一八九八年度給費生にはクロード・ロウジエヌ・メートルらがいる。フランス人給費生は全部で七十三名にのぼる。世界周遊給費は一年に五人の高等教育資格者(アグレジエ)に授与。創立者の意図は、学業を終えたばかりの若者に教師となる前に、広く世界を多少なりとも体験させ、さまざまな事柄に直面して、型にはまった単純な形式主義に疑いを抱くことを学ばせようとするのであった。「アルベール・カーン基金の概要」Notice de présentation, Fondation Albert Kahn (フランス国立史料館蔵)。

なおクローシェーの業績の先行紹介、特に最晩年及び虚子との関連について、拙稿「クローシェー来日百年—フランスへの俳句紹介者の軌跡—クローシェーの未発表書簡を中心に」(『俳句文学館紀要』十三号、俳人協会、二〇〇四)参照。

(3) 『水の流れのままた』*Au fil de l'eau* は最初のフランス・ハイカイ集である。帰国の翌年一九〇五年に、無記名で三〇部刊となったクローシェーは自著『アジアの賢人と詩人』に、二人の友人とともに、船旅に出かけフランス語でハイカイを作る練習をしたこと、「日本

の原句ではなく、フランス語訳の模倣をした」ことを語っている(『明治日本の詩と戦争』一三八頁)。拙稿「水の流れのままた」—幻の本の出現(『HI. No.18 国際俳句協会』No.1995)参照。

(4) “HAI-KAI”, *La Nouvelle Revue Française*, No.84 (1<sup>er</sup> septembre 1920) p.329-345.

(5) 注4同誌前号、一九二〇年八月一日刊の八三号には、同誌編集長ジャック・リヴィエールによる「タダへの謝意」(Reconnaisance à Dada) 他が掲載された。

(6) ルイ・アラモンからポーラン宛の手紙(『*Le Temps traversé*』Aragon-Paulhan-Triolet, Correspondance 1920-1964, Gallimard, 1994, p.29-30.

(7) Benjamin Crémieux, *Les Lettres françaises*, Du Haikai français, *Les Nouvelles Littéraires*, 29 mars 1924, p.5. “ベンジャマン・クローシェー「フランス・ハイカイについて」(『モーベル・リテレー』一九二四年三月二十九日付)”。W・L・シュワルツ著、邦訳『近代フランス文学にあらわれた日本と中国』北原道彦訳、東京大学出版会、一九七二、三二八頁。William Leonard Schwartz, *The Imaginative Interpretation of The Far East in Modern French Literature 1800-1925*, Paris, 1927

(8) Julien Vocance, *Art poétique(La Connaissance*, 1921)

(9) René Maublanc(éd), *Le Haikai Français. Deux cent quatre-vingt-trois Haikai choisis*, *Le Parnasse*, 1923 No.10/11. René Maublanc (1891-1960)『ヘーホル・ノルマルで哲学を学ぶ』高校教師をつとめた。一九二二年三月、パリのギメ美術館で、「フランス・ハイ

カイの運動」について講演。同講演を後藤末雄が「仏蘭西俳諧詩の運動」として『明星』（一九二四）に翻訳紹介している。『ハイカイ百句』（*Cent haï-kai*, 1924）がある。

(10) リルケは『N・R・F』誌の「ハイカイ」を介して初めてハイカイを知り、その感動をいち早く手紙（ネルケ夫人宛、一九二〇年九月四日付）で伝えている。その九月初旬、最初の実作をフランス語で試みている。翌月（一〇月二九日）、クーシュー著『アジアの賢人と詩人』（三版、一九一九）をパリで購入し、その晩年の所蔵本には多くの傍線などの書き込みが遺されている。晩年の作品、特にフランス語詩、またリルケの墓碑銘バラを詠った三行詩には俳句の受容がみられることが論考されている。富士川英郎「リルケと日本」（『比較文学研究』、東大比較文学会、一九六四）、ヘルマン・メイヤー（「リルケと俳句との出会い」*Rilkes Begegnung mit dem Haiku EUPHORION* 1980）、塚越敏（「リルケと俳諧」『芸文研究』、慶応義塾大学、一九八二）、拙稿「リルケと俳句」（『俳句文学館紀要』、俳人協会、一九九二）、「西洋における蕪村発見——P・L・クーシューからR・M・リルケへ」（『國文學』、學燈社、一九九六年一二月号）

(11) 拙稿「俳諧と音楽」（『國文學』、學燈社、二〇〇二年七月号、一三〇—一三八頁）

(12) 与謝野寛（仏蘭西の俳諧詩）第二次『明星』創刊号、一九二二（一）。与謝野寛による「仏蘭西の俳諧詩」の邦訳を介して、周作人によってさらに中国にも以下のように紹介された。初出「法蘭西俳諧詩」（フランスの俳諧詩）月刊誌『詩』第一卷第三期 中国新詩

社編集 一九二二年三月刊。『陀螺』（詩歌小品集）新潮社（北京）一九二五年刊。

(13) 高階秀爾「俳句とハイカイ」「大航海」（新書館、二〇〇〇年八月号）、芳賀徹『ひびきあう詩心——俳句とフランスの詩人たち』（TBSブリタニカ、二〇〇二）、藤原克己「古今集の享受と評価の歴史」（古今和歌集研究集成）第三卷、風間書房、二〇〇四

(14) Bernard Bailland, *Le cheval déçu espérait ici son coup de fouet*「失望した馬はここで鞭の一打ちを期待していた」、*Theodore Balmoral* 38, 2001, p.129. *Les Libellules et la boussole*、「蜻蛉と羅針盤」*Ibid.*, 39/40, 2001-2002, p.160-163.

(15) クーシューからヴォカンス宛の自筆書簡は、フランス国立図書館所蔵。書簡は、全部で二二通あることを確認した。一九一七年から一九五四年の最晩年までにわたっているが、大部分が未発表である（一通（一九二二）はオリジナル（個人蔵）のコピーであり、すでに発表された）。他二一通は、筆者が二〇〇一年一二月、翻訳したものである。同所蔵先の御教示をベルナル・バイヨール氏より得た。なお最晩年を中心とする一部の書簡を以下に発表した。拙稿「クーシュー来日百年——フランスへの俳句紹介者の軌跡——クーシューの未発表書簡を中心に」（『俳句文学館紀要』十三号）、なお本稿は、同拙稿を発展させたものであり、詳細にまとめたので、一部の資料の叙述に重複がある。

(16) クーシューからポロラン宛書簡一〇通は現代資料研究所I・M・E・C (Institut Mémoires de L'Édition Contemporaine) 蔵。前半の六通（一九一七—一九一九）はバイヨール氏の前記の論文中（注14）

に発表された。バイヨー氏より、書簡の所蔵先、I・M・E・Cについて御教示を得た。二〇〇一年二月に、同研究所で同書簡を調査する機会を得た。その際、後半の未発表書簡四通（一九三八―三九）の所在を確認した。すべて一〇通のオリジナルコピーを、ポーラン・アルシーフのクレール・ポーラン（Claire Paulhan）氏より恵贈にあずかった。

(17) ポーランからヴォカンス宛の書簡もフランス国立図書館 (Département des manuscrits, Fonds Vocance) に所蔵されている。書簡は全部で二九通あり、一九一九年から一九五四年にわたっている。その中に、本テーマにかかわる一通の未発表書簡、一九二〇年八月一〇日消印を確認した。書簡の大部分はバイヨー氏によって、*Théâtre Balmoral* 39/40に掲載された。

(18) Jean Paulhan, *Les haï-kai japonais, La Vie*, 6<sup>e</sup> Année, N<sup>o</sup>2, Février 1917, Paris, p.58-60.

(19) エリユアールからポーラン宛肉筆書簡はI・M・E・C所蔵。一〇〇通以上に及ぶ同書簡は、一九一八年から一九四四年にわたっており、No.1-No.6に分類されている。No.1のファイルには、最初期の書簡 (1918-1919, Cote: PLH2. C79-01. 01) が一通あり、その中に、自作のハイカイ作品を記しているエリユアールの名刺とその封筒の所在を二〇〇四年八月、確認した。最後のNo.6 (1918?-1944? Cote: PLH2. C79-01.06) のファイルには年代が特定されていない書簡がある。そのなかに本稿のテーマにかかわる未発表（一部）書簡一通の所在も確認した。なお、筆者がパリより帰国後、上記のエリユアールからポーラン宛肉筆書簡二二六通は、『エリユアールとポーランの書簡集』（Paul Eluard & Jean Paul, *Correspondance* 1919-1944 (Editions Claire Paulhan, décembre 2003)）として、昨年二〇〇三年二月刊行された。本稿提出後、二〇〇四年六月になって筆者は同書を購入した。本改訂論文執筆に際し、エリユアールの名刺についての論考（注44参照）について、同書を参考にして一部補正した。

(20) ヴォカンス著『ハイカイの本』（Julien Vocance, *Le Livre des Haï-Kai, Paris, Société Française d'Éditions Littéraires et Techniques*, 1937）（ジャクリーム・ポーラン図書室蔵）。同書の扉には、ポーランに宛てられたヴォカンス手書きの献辞が署名とともに添えられている。そのオリジナルコピーをジャクリーム・ポーラン氏より恵贈にあずかった。なおその内容の一部はバイヨーの前記の論文（注14、*Le cheval déçu espérait ici son coup de fouet*）に引用されている。

(21) ジャンロリシャル・ブロックの未発表ノート「カイエ」（オリジナルの筆写）は、フランス国立図書館 (Département des manuscrits) に所蔵されている。「カイエ」No.11、No.12（一九一九―二二）には、『アジアの賢人と詩人』の受容の痕跡やブロックの約一〇〇篇のハイカイ作品や五行形式の「ウタ」（和歌）も記されているのを確認した。それについては、後の二章で述べる。同「カイエ」の所蔵先については、クロード・ブロック (Claude Bloch) 氏、ワリロウィッチ (Tivadar Gorilovics) 教授より御教示を得た。また同図書館蔵の *Papiers Jean-Richard Bloch, Volume XV* 中に、クレーンナーからブロック宛の未発表肉筆書簡四通（一九二四―三〇）の所在を

確認した。同書簡は、本稿のテーマ「ハイカイ」とは直接関連はないが、ブロックとの文学的交流が記されている。

- (22) 拙稿「俳句と和歌発見の旅——ポール・ルイ・クシーシュエの自筆書簡をめぐって」(『比較文学研究』第七十六号、東大比較文学會、二〇〇〇、七八—九〇頁)。

- (23) (クシーシュエから「パリ大学」学長宛 東京、一九〇四年一月二三日)

「私は日本にずっと滞在しております。予期していたより少し長い滞在になりました。私の先輩のメートル氏と、同じように思いがけないほどの国に関心を持ち魅力を感じました。メートル氏が共同生活をさせて下さったおかげでそれほど出費を増やさずに滞在期間を延長することができました。彼の経験と指導のおかげで、すでに訪れた国々の研究よりも、この国の研究をより深めることができました。着手しました仕事を成し遂げるつもりでいますので、フランスに帰り次第それを提出致します。(略) 私の住所は二月末まで、日本国東京市小石川原町一〇二」。日本の住所は「Koishikawa, Haranachi 102, Tokyo, Japon. 東京市小石川原町一〇二」と書簡中に明記されているが、これは当時のメートル滞在先の住所と同一であり、一時帰国中であつたドイツの日本学者カール・フロレンツの留守宅であつた。クシーシュエが日本研究のため非常に恵まれた環境にあつたことも判明した。

- (24) 来日前の彼の勉学に関する新資料として、エーコル・ノルマル在学中(一八九八—一九〇二)のクシーシュエの貸出し書籍リストが現存する。そこには哲学書のみではなく文学書も含めて数百冊のほ

る書名が手書きで記されている。日本関連のものは、一冊、ルイ・ゴンズ(Louis Gonse)『芸術の日本』(L'Art Japonais(1883))が、一八九九年度の貸出しリストに記載されている(エーコル・ノルマル文学部図書館所蔵)。「世界周遊」応募書簡によれば、彼が修得した外国語は英語、ドイツ語のみである(拙稿「俳句と和歌発見の旅」八二—八三頁)。

- (25) メートルはフランスにおける二〇世紀初頭の日本学の先駆者。ハノイのフランス国立極東学院長(一九〇八—二〇)。ギメ美術館長補佐(一九二三年四月—二五年八月)。一八九五年、エーコル・ノルマルに入学、哲学を学ぶ。一八九九年に「世界周遊」給費生として初来日。後フランス国立極東学院の研究員として一九〇二年から約二年間滞日(日本で書いた四〇通の極東学院長宛の彼の自筆書簡パリのフランス国立極東学院所蔵)。彼の日本についての時評、論文が多数フランス国立極東学院紀要(BEFCO)に掲載されている——論文「チェンバレンの『芭蕉と日本の詩的エビグラム』(Bashô and the Japanese poetical Epigram) (Trans. As. Soc. of Japan, 1902)(Bulletin de l'Ecole Française D'Extreme-Orient Hanoi, III, N04. 1903 Octobre - Decembre) 時評「日露衝突の由来 Les origines du conflit russo-japonais」(BEFCO, 1904) 論文「日本の歴史的文献——始まりから足利時代まで La Littérature historique du Japon-des origine aux Ashikaga」(BEFCO, 1903) 他。なかでもチェンバレンの「芭蕉と日本の詩的エビグラム」についての論文はクシーシュエ滞日中にハノイで刊行され、クシーシュエと俳句とを結びつける機縁となる。



- (26) 『明治日本の詩と戦争』一四五頁。Sages et Poètes d'Asie, p.54.  
 (27) 拙稿「西洋における蕪村発見」一二八頁。  
 (28) 『明治日本の詩と戦争』六〇—六一頁。Sages et Poètes d'Asie, p.71-72.  
 (29) 同注28' 六四—六五頁。Ibid., p.81.  
 (30) 同注28' 三八—三九頁。Ibid., p.56.  
 (31) Julien Vocance, Sur le Hai-Kai français, France-Japon, No38, 1939, p.80.  
 (32) Ibid., p.81.  
 (33) 『明治日本の詩と戦争』一三八頁。Sages et Poètes d'Asie, p.132-133.  
 (34) 「序章」『明治日本の詩と戦争』三一四頁。Ibid., p.6-7  
 (35) ポーランは、「日本のハイカイ」を知る以前に、一九〇三年から一九〇五年にかけてマダガスカルに滞在し、口伝の庶民の詩を収集し初めて仏訳した。「Hain-teny merinas」と題する論文を『マシア・ジャーナル』(Journal Asiatique, 1912) に発表し、一年後、最初の著書 *Les Hain-teny merinas, poésies populaires malgaches* (マダガスカルの通俗詩) (Librairie Geuthner, 1913) となった。  
 (36) クーシュー自身の病院での医師としての仕事やイエスの歴史的研究など。クーシューからアナトール・フランス宛(『未刊書簡アナトール・フランスからポール・ルイ・クーシューへ』(Société Anatole France 1968) にも、一九一七年から一八年にかけての住所は、エベルネーのオーバン・モエ病院が記されている。書簡から当時イエスの歴史研究に取り組んでいることがうかがえる。

- (37) その例として二句を引用し、次のように説明している。  
 Ah ! Ah ! ああ！ ああ！  
 C'est tout ce qu'on peut dire ことばになるのはこればかり  
 Devant les fleurs de Yoshino. 吉野の花を前にして。  
 (原句) これはこれとはばかり花の吉野山 貞室)  
 これは赤裸々な叫びである。他の点でもこの「ハイカイ」の、そういつてよければ言語学的単純さは、劣っているものではない。美のところ、まとまりとしてとらえるには非常に多様で、難しい感情が、善良とか虚栄とか呼ばれているが、なぜその名を持つのだろうか、その一方、次の詩が示し、表し、定義づけるようなこの別の非常に明瞭な感情にはどうして名前がないのだろうか。  
 Ce monde de rose この露の世は  
 N'est, certes, qu'un monde de rose !... 確かに露の世にすぎない！...  
 Mais tout de même... だが、それでもなお...  
 (原句) 露の世は露の世ながらさりながら 一茶)  
 (38) A leur table frugale 彼らのつまましい食卓に  
 Un saucisson noir s'est invité... 一本の黒いソーセージが舞い込み...  
 Il a défoncé trois poitrines 三つの胸部を撃ち貫いた  
 (『明治日本の詩と戦争』一四二頁)  
 (39) クーシューの「序章」中の「孔子」の章に言及した箇所「驚くべきことに、全人類が参加する共通の生活が輪郭をみせつつある」による。『明治日本の詩と戦争』七頁。  
 (40) 平川祐弘「蕪村、エリュアール、ブレヴェール」『西洋の詩



東洋の詩』河出書房新社、一九八六、一一六一—一四六頁。金子美都子「俳句・ハイカイ・エリュアール——比較詩法の試み」、『講座比較文学』3 近代日本の思想と芸術Ⅰ 東京大学出版会 一九七三、三三七—三六四頁。

(41) 《methodes》は、ヴァレリーの『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』（二八九五）を指すとも考えられるが、ヴァレリーの Education et instruction des troupes 「軍隊の教育と訓練」他をさくむ《Methodes》と題する論文（二八九七—九九）を指すことも指摘されている。Paul Eluard & Jean Paul, *Correspondance 1919-1944*, p.31-32.

(42) エリュアールからポーラン宛肉筆書簡（1918-1919, Cote: PLH2. C79-01. 01）' I・M・E・C 所蔵。《Le cheval déçu espérait ici son coup de fouet》p.128. Paul Eluard & Jean Paul, *Correspondance*, p.42.

(43) *Ibid.*, p.48. *Choix de Lettres I*, p.30.

(44) ハイカイ作品が書き込まれている名刺の所在を、筆者はポーラン宛の初期の書簡（注16参照）の中に昨年二〇〇三年八月に所蔵先（I・M・E・C）で確認した。この名刺には日付の記載がなかった。その折には名刺の脇に封筒があり、その消印は一九一九年三月二四日と判読された。しかし二〇〇三年二月刊行された『エリュアールとポーランの書簡集』Paul Eluard & Jean Paul, *Correspondance 1919-1944*中、この名刺の手紙（lettre 21）「一九一九年五月」は、一九一九年五月付と推定されている。名刺に記されている「クローデルのマチネー」が同年五月三〇日に行われたこと

によっている。またポーランの返事の手紙（lettre 22）「一九一九年五月二九日」があり、「明日クローデルのマチネーに行けない」旨が記されている。従ってこの名刺の手紙の時期を五月とするのが妥当であるので、本改訂論文執筆の際に補正した。この前の書簡（lettre 20）は、同年五月一日付と推定されている。Paul Eluard & Jean Paul, *Correspondance*, p.59-59.

(45) それぞれの作品にローマ数字を付し、最初はVから始まり、名刺の左横に一篇、★Vが、題の下に四篇VI、★VIII、★XIV、XVIII、★たに一篇★XII、★XIIIが、右上に記されている。その中の五篇（★印）は、マンローに採られている（ただし、VとVIIはピリオドが修正されている）が、他の二篇は未発表である。『N・R・F』誌掲載の一篇のハイカイは、全作品同一の順序で、『マッド生』十一のハイカイ Pour vivre ici onz hatkar (1920) と題し、エリュアールの全集 (*Eluard Oeuvres Complètes*, Gallimard I, 1968, p.49-52) 中に所収されている。

エリュアール全集中に掲載されていない未発表作品——

VI Barre de cuire? et le clown/L'enfant aime à rire/Il veut cueillir la fleur d'or

銅の延べ棒と道化師／その子は笑い好き／彼は金の花を摘みながら

XVIII La terre s'enfuit /Qui me lapide au Zenith? / Le ciel d'une seul pierre.

大地が過ぎゆく／天頂で誰が私に石を投げつけるのか／ただ一なる石の天

(46) 『明治日本の詩と戦争』三頁、*Sages et Poètes d'Asie*, p.7. 拙稿「西洋における蕪村発見」一三三頁。

(47) *Paul Edward & Jean Paul, Correspondance*, p60.

「鳥たちの乳母」のハイカイは、「心」と題がつけられて、『文学』(一九一九年七月八月号)にも掲載された。ポーランのこのハイカイ (Pourtant le costaud meurt /—Même sa maladie se portait bien / Pense le chétif) は一部変更がみられるが、「ハイカイ」マン・ロロジー中のポーランの五番目に掲載されている (『Z・R・F』誌添付資料参照)

(48) 《Le cheval déçu espérait ici son coup de fouet》p.129. ノロキとリヴィエールの書簡をいくつか以下を参照。Jacques Rivière *Jean-Richard Bloch Correspondance 1912-1924*, Bulletin des amis de Jacques Rivière et d'Alain-Fournier, 1994, p.67-68. 44頁同上の原文中“Couchoux(sic)”と印刷されているが、ノランヌ国立図書館所蔵の *Papier Jean-Richard Bloch*, Volume XV中の函筆書簡には“Couchoud”と明確に記述されている。

(49) これら一一篇は、他のハイカイ作品も含めてノロキ著『詩の捧げもの』*Offrande a la poésie*(Le Torii Editions, 2001, Poitier, 2001)に再録されている。ノロキのハイカイ作品については Haruo Takahashi (Jean-Richard Bloch et le débat sur le haikai français, *Jean-Richard Bloch ou l'écriture et l'action*, BnF 2002, p.109-117.

(50) セヴァンストス夫人 (Antipipe Sévatos 1879-1950) は、ギリシヤ人で、一九一八年にクーシエールと結婚。クーシエールは一九二二

年以来同夫人所有のバリ郊外サン・クルーにある理学療法所「レ・タマリス」(後にサン・クルー病院となる)の医師となり、経営に加わる。一九一四年にはセヴァンストス夫人との間に娘マリアンヌが誕生している。

(51) アルベール・ポンサン (Albert Poncin 1877-1954) 彫刻家「エキンの四人息子の記念碑」などの作品がある。『Z・R・F』誌(一九二〇)「ハイカイ」マン・ロロジーに二篇、『ル・パンブル』誌 (*Le Pamphre* 1923) ハイカイ・マン・ロロジーに二篇所収されている。

(52) ユーネル・モラン (Hubert Morand) エーコール・ノルマル卒業生「クック」誌批評家。

(53) 拙稿「クーシエール来日百年—フランスへの俳句紹介者の軌跡—」クーシエールの未発表書簡を中心とす

(54) Cahiers Jean Paulhan 2, *Jean Paulhan et Madagascar* 1908-1910, Gallimard, 1982, p.238-239. 本書簡を含めた以下の四通は B. Bailaud, *Les Libellules et la boussole*, P.161-163

(55) サビロンのハイカイ作品『詩の微粒子』*Poussière de poème* 一一篇は『ラ・ヴァ』誌(一九一八年三月、八五頁)に掲載されている。最初から三篇を引用する。

冒頭の作品は、ポーランに関するハイカイ：  
Jean Paulhan est sur mon seuil / Tendre honte. / C'est l'amis des premiers ver.

ジャン・ポーランが戸口に／優しい羞恥／一流の詩の友人だ  
次は、鶏とその影に関する作品：

Plaque d'eau sans un pli. / Le coq qui boit et son image / Se premet

par bec.

波ひとつない水たまり／水を飲む鶏とその水に映った影が／ついでみあっている。

三番目は「蒸気機関車」に関する作品：

Sifflet de locomotive./ Jeanne, il ne faut pas pleurer. / Méchant, il ne faut pas rire.

蒸気機関車の汽笛／ジャンヌ、泣くのはおよし／ひどい人、笑わないでよ。

上記の二番目の作品を含む五篇が『N・R・F』誌に掲載されている。

なおクーシュエーが「日本的」と賞賛した「鶏とその影」のハイカイを歌詞としたフランス歌曲が、モリス・ドラージュ（ラヴェルの弟子）作曲『七つのハイカイ』《Sept Hat-Kats》(1923) 中にある。

(56) Le cheval déçu espérait ici son coup de fouet, p.129.

(57) 文中中の集会の日時の書き込み、二月五日の木曜日の記述から、*Chronique du 20<sup>e</sup> siècle* (二〇世紀クロニク) にあたり、二月五日の木曜日は一九二〇年と特定した。一九二〇年二月五日に、アンデパンダン展でのバリの第二回ダダ会議がシャンゼリゼのグランパレで行なわれている。第一回の開催は、一九二〇年一月一三日であり、「文学の最初の金曜日」と呼ばれた。トリスタン・ツアラ著、小海永二・鈴木和成訳『ダダ宣言 *Sept Manifestes Dada Et Lamphis-teries*』竹内書店、一九七〇、一四二頁。

(58) エコール・ノルマルのセレスタン・ブグレ教授は、ジャン・プトゥソンのペンネームでアンソロジーに掲載されている。その特定は

W・L・シュワルツによって確認されつつある (Les Libellules et la boussole, p.167)。

(59) 「ポーランは、アンドレ・ジッドの推薦で、七月にジャック・リヴィエールの秘書職に指名されたところだった」《*Le Temps traversé*》Aragon-Paulhan-Triolet, Correspondance 1920-1964, p29.

ポーランが『N・R・F』誌の編集者となったことについては、ヴァレリーからポーラン宛書簡(一九二〇年六月二日付)にも記されている。『ヴァレリー全集 補巻1』筑摩書房、一九七九、二二六頁。

(60) Les Libellules et la boussole, P.165.

(61) このハイカイの作者は、「初会合」に招待されていたボンサンである。注51参照。

(62) 未発表書簡である。西暦年が記されていないが、封筒の消印から一九二〇年と判読した。注17参照。

(63) 三句の仏訳の作者名は記されていないが、「咲くからに見るからに花の散るからに 鬼貫」のこの仏訳を詩人リルケが手紙に二度も引用し、絶賛していたことはよく知られている(注10参照)。なおこの仏訳はメートルに依拠している(明治日本の詩と戦争)一五四頁、注27参照)。この仏訳を歌詞としたフランス歌曲が、モリス・ドラージュ作曲『七つのハイカイ』中にある。拙稿「俳諧と音楽—フランス歌曲・器楽曲」、九九頁。

(64) 刊行年が一九〇三と記されているが、これは誤記である。(注3、写真4参照)拙稿『水の流れのままに』—幻の本の出現 参照。

(65) これは「戦争百姿」の発表年であり、誤記である。この「サーカスにて」Au Cirqueの発表年は、『ハイカイの本』には、一九二〇

年と記されている。Julien Vocance(1878-1954)『クレーシュエの創始したフランス・ハイカイの後継者。虚子の渡仏後(一九三六)、虚子との交流が始まり、虚子からヴォカンス宛書簡がフランス国立図書館に所蔵されている。ヴォカンスとその作品に関しては次を参照。松尾邦之助「ハイカイの本」(「真珠の発見」)⑤『俳句』、一九六四)『Chantal Viart, Julien Vocance ou l'oiseau de la mélancolie, Paris, Accent tonic, 1995.』

(66) ビエール・アルノー・ピロー (Pierre Albert-Briot 1876-1967) 詩人、画家、彫刻家。一九一七年二月の『ダダ』二号に寄稿してからダダの運動に参加。のちのシュールレアリスムの運動にも参加。『三一のポケットの詩』『日々の詩』などの作品がある。ツブラ著、小海・鈴村訳『ダダ宣言』、一四五頁。

(67) 注15、拙稿「クレーシュエ来日百年―フランスへの俳句紹介者の軌跡―クレーシュエの未発表書簡を中心に」参照。

(68) 高浜虚子(「ヴォーカンス氏招宴」『渡仏日記』、昭和一一)。拙稿「クレーシュエ来日百年―フランスへの俳句紹介者の軌跡」

(69) 松尾邦之助「ハイカイ・ド・フランス」(「真珠の発見」)⑥『俳句』、一九六四)による紹介がなされている。

(70) J.Vocance, Le deuxième groupe de haïjins, Sur le Hai-Kai français, Paris, France-Japon, N°38, p.82.

「そして一九一九年から一九二〇年へと至るわけであるが、このころになるとあの悲惨な時期の生き残りが家庭に戻ったことで、クレーシュエをリーダーとするハイジンの第二グループが結集する。そこには最初のグループに属していたボンサン、モランやヴォカンスの

ほかに、ルネ・モーブラン、ジャン・ポーランそしてポール・エリュアールが参加した。これらの新参者は古参者に劣らず新しい崇拜に忠実であり熱狂的であった。こうして、このころから『N・R・F』編集長ジャック・リヴィエールと緊密に連携していたポーランの働きで、一九二〇年九月号の同誌にはこのグループに属する詩人のアンソロジーと、それに加えてジャン＝リシャル・ブロックなどのすべれた作家の試作が発表された」

(71) ヴォカンスからポーラン宛書簡(一九二二年二月一〇日付、一九二九年五月三〇日付、一九四九年一月二日付他)、『Les Libellules et la boussole, p.170, p.175, p.180. (注14参照)』

(72) Les Libellules et la boussole, p.160.

(73) Paul-Louis Couchoud, *Le haïkai, Les épigrammes lyriques du Japon*, La Table Ronde, Paris, 2003.

(74) Eric Dussert (ed), *Au fil de l'eau, les premiers haïku français* [Paul-Louis Couchoud, André Faure, Albert Poncin], Mille et une nuits, 2004. 残念なことと同書には刊行年など誤まりがみられる。

(75) *Anthologie du Haïku en France* (Sous la direction de Jean Antonini, Aléas Editeur, 2003)

〈資料〉「N・R・F」誌「ハイカイ」アンソロジーテキスト及び全訳（柴田依子）

## HAÏ-KAÏS

Les haï-kaïs sont des poèmes japonais de trois vers ; le premier vers a cinq pieds, le second sept, le troisième cinq-est difficile d'écrire plus court ; l'on dira : moins oratoire. La poésie japonaise de treize siècles tient, à peu près, dans ces miettes.

Basil Hall Chamberlain les appelle épigrammes lyriques. « Lucarne ouverte un instant », dit-il, ou « soupir interrompu avant qu'on l'entende ». De toute manière, ce sont des poésies sans explication.

Paul Louis Couchoud a su les traduire †.

\*  
\*\*

Le haï-kaï est pittoresque, ou bien mystique.  
Voici le canard sauvage :

*Il a l'air tout fier  
D'avoir vu le fond de l'eau  
Le petit canard.*

†. Dans : *Sages et poètes d'Asie* (Calmann-Lévy, édit.)

## ハイカイ

ハイカイは三行からなる日本の詩である。第一行は五音節、第二行は七音節、第三行は五音節である。これ以上短く、言いかえれば、言葉少なに書くのは困難である。一三〇〇年にわたる日本の詩歌は、ほぼこのような小片から成り立っている。

バジル・ホール・チェンバレンはハイカイを抒情的エピグラムと名づけている。「一瞬開いた天窓」と彼は言うし、また「人に聞かれる前に途切れたため息」とも言っている。いずれにせよ、それは説明しない詩である。

ポール・ルイ・クーシューはハイカイを翻訳することができた(1)。

ハイカイは絵画的であり、あるいは神秘的である。  
野鴨の詩を挙げてみよう――

すっかり誇らしげ  
水の底を見てきたのを、  
小さな鴨。

(原句 水底を見て来た顔の小鴨かな 文草)

(1)『アジアの賢人と詩人』(カルマン=レヴィ出版)

Le bon poète embarrassé :

*De ma baignoire  
Où jeter l'eau bouillante ?  
Partout des cris d'insectes.*

Voici cependant l'écoulement des apparences :

*Elles s'épanouissent, alors  
On les regarde, — alors les fleurs  
Se flétrissent, — alors...*

\*  
\*\*

Dix faiseurs de haï-kais, qui se découvrent ici réunis autour de Couchoud, tâchent à mettre au point un instrument d'analyse. Ils ne savent pas quelles aventures, ils supposent la plupart que des aventures attendent le haï-kai français — (qui pourrait trouver par exemple la sorte de succès qui vint en d'autres temps au madrigal, ou bien au sonnet ; et par là former un goût commun :

ce goût justement qui passe pour préparer la venue d'œuvres plus décisives.)

JEAN PAULHAN

困惑した心優しい詩人の詩。

湯ぶねから  
熱い湯をどこに捨てよう？  
いたるところ虫の声。  
(原句 行水の捨所なき虫の声 鬼貫)

しかしまた、目に見えるものの移ろいの詩もある。

花々は咲く—そして  
人は見る—そして花々は  
散ってゆく、—そして…

(原句 咲くからに見るからに花の散るからに 鬼貫)

クージューのもとに、ハイカイの作り手十人が初めてここに集い、分析の道具を仕上げようと努める。それがどんな冒険かはわからないが、幾多の冒険がフランスのハイカイを待ちうけているだろうと彼らの多くが考えている。— (フランス・ハイカイは、例えばかつてマドリガル、あるいはソネットが得たたぐいの成功をなしうるのではないだろうか。それによって共通の趣味が形成されるかもしれない：

まさにこの趣味が一層決定的な作品の到来を準備するものとなるであろう。)

ジャン・ポーラン

AU FIL DE L'EAU

『水の流れのままに』

*Le convoi glisse déjà  
Adieu Notre-Dame  
Tiens!... la gare de Lyon!*

荷船ははや滑り出している。  
さようならノートルダム  
おや!... リヨン駅だ!

*Sur le bord du bateau  
Je me hasarde à quatre pattes.  
Que me veut cette libellule?*

船縁に  
思い切って四つん這い。  
この蜻蛉は私に何の用なの?

*Les joncs même tombent de sommeil.  
Je rôtis délicieusement  
Midi.*

藺草さえたまらなく眠い。  
私はこんがり焼ける  
まひるどき。

*Dans le soir brûlant  
Nous cherchons une auberge.  
O ces capucines!*

燃ゆる夕暮れ  
私たちは宿を探す。  
ああこの金蓮花!

*Sur le chemin de halage  
En bonnets de fous  
Deux bourricots.*

曳船道に  
道化帽子の  
ロバ二頭。

*Le vieux canal  
Sous l'ombre monotone  
S'est vert-de-grisé.*

古い運河  
影は単調  
緑青色に。

*La vache repue  
Ne voit que le pied  
Du saule argenté.*

満腹の雌牛  
眺めるは、ただ  
白柳。

*Le fleuve mal endormi  
Fait vivre dans la terreur  
Le village pelotonné.*

浅い眠りの河は  
恐怖にさらす  
うずくまった村を。

*Dans la nuit silencieuse  
Le fleuve épuisé et la vieille tour  
Se rappellent leur vaillance.*

夜のしじま  
くたびれた河も古い塔も  
かつての武勲を思い出す。

*Une simple fleur de papier  
Dans un vase.  
Eglise rustique.*

一輪の簡素な紙の花  
花瓶に。  
田舎の教会。

*Elle hale le bateau  
Quand l'épaule est meurtrie,  
Elle tire avec le ventre.*

彼女は船を引く  
肩が傷つくと、  
腹で引く。

1903.

PAUL LOUIS COUCHOUD

1903年

ポール＝ルイ・クーシュー

## AU CIRQUE

『サーカスにて』

*Matinée à Médrano :  
Dans une attente joyeuse  
L'immense cirque pépie.*

メドラノの昼興行、  
楽しい期待の中で  
大きなサーカス小屋はざわめく。

*Dans des satins, des lumières,  
Et des bouffées de crottin,  
Voici venir l'écuyère :*

サテンにつつまれ、ライト浴び、  
そして馬糞の臭いをぶんぶんさせて、  
女曲馬師のご登場—

*Avec ses écailles lie de vin  
Et son sourire carmin,  
Une livrée verte la présente.*

赤紫の鱗片つけて  
真っ赤な笑みやら見せて、  
緑のお仕着せ彼女を紹介。

*Des galops égaux  
Au-dessous de sauts  
Crevant des cerceaux.*

なめらかなギャロップ  
その上で跳躍して  
輪を次々にくぐり出る。

\*

*Sur les joues des soufflets se plaquent,  
Les corps chutent en claquant le bois...  
Les tout petits se cachent.*

平手うちを食らわせ合う、  
木を打ち鳴らしながら倒れる…  
小ちゃい子たちは隠れる。

*Le clown a déclanché des rires frénétiques :  
Il fit, en s'asseyant, fuser  
Un air léger de musique.*

道化師が爆笑を誘った—  
彼が、座ると、  
軽い音楽がわきおこる。

\*

*L'acrobate  
Ne peut plus  
Dégager sa vertèbre.*

軽業師は  
もはやもとに戻せない  
椎骨を。

*Après le « tour »  
Son visage se crispe :  
Il sourit.*

「曲芸」のあと  
その顔が引きつっている—  
それでも笑顔。

\*

*Comme une balle élastique,  
Projeté par le tapis,  
Il bondit, bondit, bondit.*

ゴム毬のように、  
絨毯に弾かれて、  
彼は跳ねる、跳ねる、跳ねる。

*Dans des splendeurs voltaïques  
Tourbillonnent des corps ailés...  
Au-dessus d'un grand filet.*

ボルタ電池のまばゆい光の中で  
羽ある身体が旋回する…  
大網の上で。

\*

*Après ces éblouissements  
Nous ramenons, dans la nuit noire,  
Le désespoir de nos enfants.*

こうした眩惑のあと  
暗い夜に、わたしたちが連れ帰る、  
子供たちの絶望を。

Mai 1916.

JULIEN VOCANCE

1916年5月

ジュリアン・ヴォカンス



POUSSIÈRE DE POÈME

*Flaque d'eau sans un pli.  
Le coq qui boit et son image  
Se prennent par le bec.*

\*

*Elle a dit : Oui,  
Mais elle a répondu trop vite.  
J'ai compris : Non.*

\*

*Sur l'épaule du soir  
Comme d'un frère vénérable  
Ne puis-je m'accouder.*

\*

*L'obus en éclats  
Fait jaillir du bouquet d'arbres  
Un cercle d'oiseaux.*

\*

*Trou d'obus où cinq cadavres  
Unis par les pieds rayonnent,  
Lugubre étoile de mer.*

GEORGES SABIRON

Georges Sabiron, soldat au 149<sup>e</sup> d'Infanterie, a été tué dans les tranchées d'Arcy Sainte-Restitue, quelques mois après avoir écrit ces haï-kaïs, que la *Vie* (Mars 1918) a publiés.

『詩の微粒子』

波ひとつない水溜り。  
水を飲む鶏とその水に映った姿が  
ついはみ合っている。

彼女は言った——いいわと、  
だが彼女はあまりに早く答えすぎた  
僕は理解した——いやと。

夕べの肩に  
尊敬する兄のように  
肘をかけることはできないでしょうか。

破裂する砲弾に  
木立から飛び立つ  
鳥の群れ。

砲弾の穴の中五つの死体が  
脚でつながって放射状にひろがる、  
陰鬱な海星。

ジョルジュ・サビロン

ジョルジュ・サビロンは第149歩兵部隊の兵士であったが、これらの詩は、1918年3月『ラ・ヴィ』誌に掲載された。これらのハイカイを書いて数ヶ月後、アルシー・サント＝レスティチュの塹壕で戦死した。

POÈMES SUR MESURE

*Au-dessus il y a le ciel et plus bas le plafond  
Et sur la table une boîte de petits pois  
Avec le mode d'emploi.*

\*

*Les oiseaux chantent toujours au sommet de la maison  
Le Printemps dans les villes  
Est sur les toits.*

\*

*Un sentiment est une robe à traîne  
Il est bien malaisé d'empêcher  
Qu'on ne marche dessus.*

\*

*Les courbes sont les promesses des yeux  
Mariage secret d'un œil  
Avec un fauteuil.*

\*

*Le train sur son chemin géométrique  
Traverse le mois de Juin  
Les coquelicots font la haie*

PIERRE ALBERT-BIROT

『おあつらえの詩』

頭上には空がありそれより低いところに天井がある  
そしてテーブルの上にはグリーンピースの缶詰がある  
使用説明書つき。

鳥はいつも家のでっぺんで歌う  
都会の春は  
屋根の上にある。

感情は裳裾をひくドレス  
人がその上を踏みつけないようにするのは  
とても難しい。

曲線は眼の許婚者である  
秘密の結婚  
眼と脇掛椅子との。

幾何学的線路を走る列車が  
六月を通過する  
ひなげしが垣根となる

ビエール・アルベール＝ビロー

MAISON EN POITOU 『ポワトゥーの家』

*La barrière ouverte  
Laisse voir les buis frais taillés,  
Tendre pluie d'hiver.*

開いた柵から  
刈り込まれた爽やかなツゲが見える、  
冬のおだやかな雨。

*La pie, sa queue droite,  
Arrive, fait trois petits bonds,  
Se pose et attend.*

カササギは尾をまっすぐにして、  
やってきて 小さく三たび跳ね、  
休んで待っている。

*Dans le vent du soir  
Le corbeau retardataire  
Croasse et se hâte.*

夕風に  
遅れ鴉が  
鳴き急ぐ。

*Autour de ma maison  
Dans la nuit le vent d'hiver  
Chante sur deux notes.*

家の周りで—  
夜 冬の風が  
二音で歌う。

*Veillée solitaire ;  
L'heure où les chenêts renoncent  
A nous consoler.*

寂しい夜、  
薪置き台が  
わたしたちを慰めるのを止める時間。

*Nuit d'hiver, campagne,  
Braise rouge dans la cheminée,  
Et mes amis loin.*

冬の夜 田園、  
暖炉の赤い燵、  
そしてわが友は遠し。

\*  
*Nuit sur les fenêtres,  
Nuit sur les champs et les routes,  
Moi seul et ma lampe*

窓には夜、  
野や道にも夜、  
我独りと、わがランプ

\*  
*Contre le sein nu  
L'enfant rit, tourne la tête  
Et le lait déborde.*

あらわな乳房に寄り添い  
子供は笑い振りかえる  
すると乳がこぼれる。

\*  
*Le bras de la mère  
Le long du petit enfant,  
Un fuseau géant.*

母の腕  
幼児に巻きつく、  
巨大な糸巻き。

\*  
*Mes deux mains se ferment  
Sur un volume sans égal,  
Le corps de l'aimée.*

私の両の手は閉じる  
比類なき容量の上で、  
愛する人の肉体。

\*  
*Je m'éveille la nuit,  
La lune baigne la route,  
Désir de voyage.*

夜、目覚めると、  
月が道をぬらしている、  
旅への憧憬。

JEAN-RICHARD BLOCH

ジャン＝リシャール・ブロック



\*  
*L'automobile est vraiment lancée  
Quatre têtes de martyrs  
Roulent sous les roues.*

自動車が本当に突っ込んだ  
犠牲者の四つの頭が  
車輪の下に転がった。

\*  
*Roues des routes,  
Roues fil à fil déliées,  
Usées.*

道路の車輪、  
少しずつほどけ、擦り切れてゆく、  
車輪。

\*  
*Ah ! mille flammes, un feu, la lumière,  
Une ombre !  
Le soleil me suit.*

ああ！たくさんの炎、一つの火、光、  
一つの影よ！  
太陽が私についてくる。

\*  
*Femme sans chanteur,  
Vêtements noirs, maisons grises,  
L'amour sort le soir.*

歌を捧げてくれる人もいない女、  
黒い服、灰色の家、  
夕暮れ愛は出かける。

\*  
*Une plume donne au chapeau  
Un air de légèreté.  
La cheminée fume.*

羽が帽子に  
軽感をあたえてくれる。  
煙突がくゆる。

PAUL ELUARD

ポール・エリュアール

*Le petit port est endormi.  
Soudain dans le silence gris,  
Le bout des mâts s'éclaire !*

小さな港はまどろんでいる。  
突然灰色の静寂の中、  
帆柱の先端が輝く！

\*  
*Des canards sauvages  
Posés sur la mer.  
L'ombre d'un nuage.*

野鴨が数羽  
海の上に浮かんでいる。  
雲の影。

MAURICE GOBIN

モーリス・ゴバン

\* \*  
*Nous avons seize ans tous les deux,  
Mais quand elle en aura dix-huit,  
Je n'en aurai que dix-huit.*

僕らは二人とも十六歳、  
でも彼女が十八になったら、  
僕はまだ十八歳。

HENRI LEFEBVRE

アンリー・ルフェーヴル

\* \*  
*Le berger crache des louis d'or,  
La vache lâche un arc-en-ciel :  
Coucher de soleil.*

羊飼いがルイ金貨を吐く、  
牛が虹を放つ—  
日没。

\*  
*Le banc de bois est humide,  
Le banc de pierre est glacé :  
Rendez-vous d'automne.*

木のベンチはぬれている、  
石のベンチは冷えびえしている—  
秋の待ち合わせ。

ALBERT PONCIN

アルベール・ボンサン

*Nuages rouges du couchant.  
Dans un trou vert  
Un mince croissant de lune.*

\*

*Nuit d'alerte.  
Le projecteur à l'horizon  
Ouvre et ferme son éventail.*

\*

*Dans la nuit noire  
Une étoile et son reflet.  
Il y a donc de l'eau?*

\*

*La nuit en Bretagne.  
Un vieux chant passe et s'en va,  
Dans un bruit de sabots.*

\*

*Grincement de roues.  
Un tas de foin grossit  
Jusqu'à cacher la lune.*

\*

*Sur la plage  
Un bout de planche :  
Un grand navire a fait naufrage.*

\*

落日の赤い雲。  
緑の穴の中の  
細い三日月。

警報発令の夜。  
地平線に向って投光機が  
その扇を開いては閉じる。

漆黒の夜に  
ひとつ星とその反射  
すると水があるのだろうか

ブルターニュの夜  
昔の歌が聞こえては、通り過ぎてゆく、  
木靴を響かせて。

車輪のきしむ音。  
干し草の山は  
月が隠れるほど高くなる。

砂浜に  
板切れ一枚—  
大きな船の難破。

*Au clair de la lune,  
Dans la brume un pêcheur s'enfonce,  
Vers le bruit de la mer.*

\*

*Mes amis sont morts.  
Je m'en suis fait d'autres.  
Pardon...*

\*

*Je veux bien la voir,  
Son fiancé aussi,  
Mais pas ensemble.*

\*

*Je pleurais dans le fauteuil d'osier,  
Elle m'a dit : « Consolez-vous »  
Et s'est mise à pleurer.*

\*

*Reste à la fenêtre,  
La face dorée par la lampe,  
Et les cheveux baignés de lune.*

RENÉ MAUBLANC

月明かり。  
霧の中 漁師が、  
潮騒に向かって進んでゆく。

友人たちは死んでしまった。  
また別の友人を作った。  
すまない……

私は彼女に会ってもいい、  
その許婚者も構わない、  
しかしふたり一緒はいやだ。

私は柳の脇掛椅子に座って泣いていた、  
彼女は「元気を出して」と私に言った  
そして泣き出した。

窓辺にとどまっておいで、  
顔はランプで金色に染まり、  
髪は月光に濡れている。

ルネ・モーブラン

*La fumée s'envole au Nord* 煙は北へ飛ぶ  
*Le papillon blanc vers l'Est* 紋白蝶は東へ  
*Vent frivole* 移り気な風

\*

*La rivière coule nue* 川は裸で流れる  
*Les jeunes arbres vont vivre* 若い木々は生きゆく  
*Dans les bois* 森の中で

\*

*Qui te parle en souriant ?* 誰が微笑みながらお前に話しかけているの？  
*Non, c'est le ruisseau qui roule* いいえ、それは小川が揺すっているの  
*Quelques fleurs* 何輪かの花々を。

\*

*La fille étonnée recherche* 驚いた娘は探る  
*Les instincts bêtes féroces* 猛獣のような衝動を  
*Du sermon* 説教の

\*

*Le costaud pourtant est mort* それでも頑丈な男が死んだ  
*Même sa fièvre allait bien* 彼の熱さえも元気がよかったのにと  
*Dit le faible* 虚弱な男が言う

\*

*La mère au fond du jardin* 母親は庭の奥  
*Ce n'est pas goût pour la lune* 月を愛でるためではない  
*L'enfant crie* 子供が泣き叫ぶ

JEAN PAULHAN.

ジャン・ポーラン